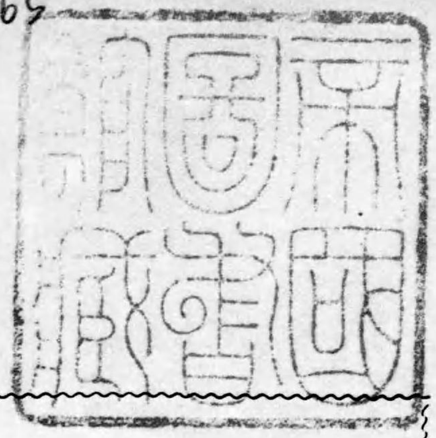
投

特103
65



序

新年の文壇を飾るべく、美しき裝ひを凝らし讀者の前へ展開された心の力は著者が絶大の努力と奇拔な着想が書中自ら溢れ。いかにも近來の大作雄編として憚るところはない、予に其序を徵されしも、慾じて粗野の文字を卷頭に列れるは餘りに心なきのわざくれと知り露骨に予の此書に於ける感想を述ぶること爾り

於湘南の客舍
前田介石誌

大正
6. 1. 11
内交

説ものこゝろの力

稲岡奴之助著

仁和寺の山門

一重は最早盛りを過ぎたが、八重は今が見頃だといふ四月中旬過の午前九時頃、花の名所で聞えた京都は洛西、御室仁和寺の山門前を、鳥打帽を被つて着物の裾を端折り、白いメリヤスの股引に草鞋穿といふ身軽な扮装をした男が、更紗の袋に入れた釣竿と、京都遊では引摺りと稱する銅の釣竿を提げて、衣笠村の方から來て鳴瀧村の方へとスタ〳〵歩いて來た。

其時、山門の下へ水菓子や駄菓子の店を出してゐる婆さんが、其男の姿を認めると慌てたやうに、

「お早うございます、まあ寄つておいでなさいまし、お釣魚でございますか。」

と聲を掛けて低頭をした男は歩きながら輕い會釋をして、

「やア何時も御精が出ますねえ、これから又嵯峨の方へ釣られに行くのです、はゝゝ。」

と行過ぎたが、その笑つた顏は什麼も淋しく、病人でゝもあるのか、何となく生氣がなくて蒼白かつた。

「釣魚かね、今頃何が釣れるんだらう。」

婆さんの店の床几に腰を掛けて駄菓子をかじりながら茶を飲んでゐた土地の者らしい農夫體の老人が斯ういつて男の後姿を見送つた。

「もうソロ〳〵鮠が釣れるといひますよ。」

「嵯峨でかね、嵐山の近邊には釣場はない筈だが。」

「なあにお前さん、那の方は釣れても釣れなくつても可いのさ、半分遊びだからね嵐山の花でも見ながら一日河原に立つてれば役目は濟むのさ。」

「はゝゝそいつは暢氣で好い、何處の人だへ那の人は、何だか見たやうな人だが。」

「おやお前さん知らないのかい。」

と婆さんは漸う店の飾りを綺麗に爲了つて、後へ手を廻すと、握拳をして トン〳〵と二つ計り自分の腰を叩いたが、老人の前の床几に掛けて長い煙管を取上げた

「ありやお前さん、等寺院村の北川さんの若旦那さ。」

と煙管に火を點けた、

「北川さんといふと、元京都府の事務官をしてゐなすつた北川さんかね。」

「爾うですよ。」

「はテね、北川さんには那麼御子息はなかつた筈だが……。」

「お前さん年が寄つたので耄碌をおしだねえ、ありや御養子ぢやないか。」

「あゝ御養子か、それは〳〵。」

と老人はうつて、

「しかし我々百姓老爺と違つて、那麼いふのは結構な御身分ぢや、其日其日に汗水流して稼いで行かなくつても、那麼して釣魚でもして遊んでゐれば其日が送れるのぢや、我々はお前、年が年中終日土だらけに成つて働いた上、漸との思ひで出來た菜や大根を籠や荷車で市へ持つて行かねば鼻の下が干上るのぢや、あゝあゝ、孫子の代まで水呑百姓はさせるものぢやないせ、喃お隣さん、爾うぢやないか。」

と老人は述懐めいた事を云ふ。

婆さんは莞爾笑つて首を掉つた、

「いゝえ、そりやお前さんの量見違ひさ、宅の鯛のお刺肉より隣家のお茶漬の方が美味しく思はれるのと同じで、他から見れば結構なやうでも那麼でなか〳〵結構ぢやないんだよ那の方も中々御苦勞がお有んなさるんだよお前さん。」

「はテね。」

と老人は首を捻つて、

「そりや又何ういふ譯ぢやな。」

婆さんが其れに答へやうとした時、紡績らしい絣の着物に同じ袷羽織を着て、三歳計りの可愛らしい女の子の手を曳いた丸髷の美人が、何か子供に話しながら這の山門へ近づいた見るより婆さんは床几を離れて、

「お早うございます、御參詣でございますか、些と休んでおいでなさいまし。」

と小腰を屈めた。

麗かな春日は朱ぬりの山門を美しく照してゐた。

御大師様へ

「難有う、毎日お天氣續きで結構ですねえ。」
と慎ましやかな挨拶をして、笑顔と共に婆あさんの店の前を通り、櫻咲く境内の奥へと急いで行く美人の後から、
「左様でございます、毎日お天氣で怱麽難有い事はございません、行つていらつしやいまし、お歸りにおよりゝ遊ばしませ。」
と婆あさんは二三度低頭をしたが、ぼかんとしてゐる老人の方を振り返つて、
「あれがお前さん今の若旦那の奥様だよ。」
と眼を睜つた
「那の別嬪さんがかい、何歳かしらないが、見たところ未だ二十二三だが、此の邊には珍しい好い女だなア。」

「おほゝゝゝお前さんにでも爾う見えるかい、そりやお前さん、等寺院村の北川さんの若奥様といや誰知らぬものゝない別嬪さんさ、其の上に氣質の優しい腰の低いお方でねえ。」
婆あさんは聲に力を入れて褒め立てたが、何を思つたのか、忽ち其の聲を落してとほろりとして見せた。
それを老人は怪しんで、
「何うしてね、何が其様なに氣の毒なのぢやい。」
「そりやお前さんはツイ此頃まで大坂の方へ行つてゝ、五六年も此土地にゐなさらないんだのだから、何も知りなさるまいが、北川さんぢやお母さん、今の奥様も先刻の若旦那も他家から來た人だからねえ、夫婦養子さ。」
「成程な、北川さんには一人もお子様がなかつたから喃。」

鯛うだとも。それでお前さん、那の奥樣は五年程前に何でも江州の八幡邊から養女に來なすつたんだが、間もなく大和の郡山から貰ひ なすつたのが先刻の若旦那さ。」

「なる程。」

「そして二人を女夫にして、間もなく今彼處へ遣れてお行きなすつたお嬢さんが出來たのだがね、好事魔多しとか何とかいつてね、好い事計りは長く續かないものでね。」

と婆あさんは嘆息し、

「那のお嬢さんがお生なすつてから間もなく、若旦那の身體がぶらつと惡くなつて種々良い醫師にも診て貰ふし、有馬の湯治にもお行きなすつたが、何うも身體がすつきり爲ないんだよ。」

「道理で青い顏をしてると思つた。」

「それで勤めてをいでなすつた下京の會社の方も勤まらないで辭職て了つて、毎日まあ那麼して釣魚をするとか、ぶら〳〵其處邊等を歩き廻るとかして遊んでゐらつしやるんだが、それがお前さん大旦那や大奥樣のお氣に入らないんだよ、一時離縁談しもあつたんだが、那の奥樣が、那麼で中々の貞女でねえ、親御さんとお聟さんの中に立つて種々取りなしを爲さるので、切れかゝつた縁の絲が漸と繋がつてるよいふな譯さ、しかし大奥樣といふ方がお前さんも知つてるやうな氣むづかしやだから何れ一度は大嵐が吹くだらうッてね近所ぢや皆噂をしてるんだよ、それといふのが元が他人だからねえ、那麼で若旦那なり奥樣なり、何方か一人が親身の血を分らいてゐると爾うでもないんだがね、夫婦養子で何方も他人といふんだから、好い時は好いが、一つ物が間違ひ出すと滅茶滅茶さ。」

「むゝ、そりや爾ういふもんだなア。」

「今の奥樣は何うぞして若旦那の身體を壯健にして、元のやうに親御樣方の氣に入

るやうに爲たいと自分一人骨惜しみせずに動いて〳〵、此頃ぢや西陣の織屋さんの賃機をなさるんだとさ、三日目にお召を一反織揚なさるつていふがね　それ程にしても未だ〳〵親御さん方のお氣に入らないもんだから此上は信心して神佛のお助けを願ふよりないと那麼して此寺の御大師樣へも日參なさるんだよ。」

「爾うか若いにしちや感心な心懸けのお人ぢやな！」

二人が恁麼噂をしてゐる中、一汽車毎に花園停車場から吐き出されて來る男女が晴着の袖を春風に薫らして、松靑き双ケ岡の裾の方から這の山門へと集ふて來た、自働車も來れば俥も來る、さゞめく聲、笑ふ聲、春はこゝもとばかりに聚まつたやうで、婆あさんは最早他人の噂どころではなかつた。

養子の家筋

仁和寺山門の茶店の婆あさんの噂の的となつた北川家といふのは、洛西衣笠村字

等寺院村では四五代續いた舊家で、先代の世までは其邊切つての大地主であつたが年來不運が續いて、所有の田畑山林も漸次に人手に渡り、當主時輔の代に成つては最早殘るものは今住居してゐる家屋敷と、他に田畑が少々有る許りで、更に昔の俤はなくなつた

けれども當主の時輔は中々の人物で二十歳の時京都府の雇ひに奉職して以來、三十年間の勤續で雇員から屬官となり屬官から高等官に進み、十年程前には事務官として相應の令名があつたが、一歳偶と腦を疾んだが原因で半身不隨のやうな病患に罹り、其儘官を辭して引退し、爾來十有餘年間、在官の時の恩給と、所有の田畑から上つて來る僅かばかりの小作料とで一家の生計を立てゝゐるのだ。

家族は當主の他に妻の喜代子、養子の文雄、嫁の鈴江と、養子夫婦の間に擧た今年三歳になる春江といふ女の子と、先代から飼殺しのやうになつてゐる朴平といふ六十餘りの老僕、お釜といふ三十何歳に成る年增の下女といふ上下七人暮しだ。

何ういふ因縁か這の北川家は代々養子の家筋で、當主の妻の喜代子は家付きの娘であるが、時輔夫婦の代に成つてからも不思議に子の縁がなかつた二度までも他から養子を貰つたが、悉な五年三年で世を早うしたので、今から六年前今の養子文雄を大和の郡山から貰ひ、同時に世話する人あつて江州八幡から鈴江を養女に貰ひ受け、この二人を娶合して世に謂ふ夫婦養子にしたのであつたが、養子文雄は元來柳の質で、近年は何うやら肺に異狀があるらしく、年中青い顔をして元氣はなく、元々故郷の中學校をも卒業した程故、北川家へ入家の當時は、下京の○○會社へ出勤し、月々三十五圓の俸給を受て家計の輔をしてゐたのであつたが、爾うした痼疾の爲めに缺勤又缺勤といふので會社の方も不首尾となり、遂に諭示退社といふやうな結果となり、この一二年は何の爲す事もなく唯だぶら〳〵として遊び暮らしてゐるのだ。

それが養父時輔よりも養母喜代子の氣に入らず、一家は何時も此の文雄問題で風

なきに浪を立たせるのであつた。

別に他には異狀はないが、左の足が惡いため、一二丁の道を歩くにも杖の力を借らねばならぬといふ、進退不自由な當主時輔は、今日も庭に面した南向きの椽へ籐の安樂椅子を持ち出し、ぽか〳〵と暖かい春の日を全身に浴びながら新聞を讀んでゐた。

取る年六十二の顔には比較的皺も少く、色つやも好く、雪のやうに白い頭の髪がキラ〳〵と春日の光に輝いてゐた、狹からぬ庭には長閑な春の氣分が一杯に漂よふて、何處からともなく折々花の香が匂ひ漂よふのであつた。

其處へ座敷の方から跫音がして、つと姿を顯したのは妻の喜代子で、

貴方、まあ呆れるぢやありませんか、今日も又釣魚ですよ　嵯峨だ梅津だつて毎日々々、何が釣れるか知らないけれど餘まり人を莫迦にしてるぢやありませんか、那麼でまあ全體何うする丁簡なんでせう。」

と口癖の養子文雄の小言を云ひ始めた。

太公望

喜代子は所天時輔とは八歳違ひの今年五十四だといふのに、太り肉の未だ水々として、髪を丸髷に結ふて、鈴仙らしい竪縞の不斷着に黑繻子の帶をしめた風采が五十の坂を越した婦人とは見えなかつた、時輔は讀んでゐた新聞を放して、眼鏡越にジロリと妻を見遣つて、又かといふやうな顏をした、

「はゝゝ釣魚かな、それも可からう太公望は八十まで釣をしてゐたといふからな ア。」

「談ぢやありませんよ貴方。

と喜代子は險のある眼を屹と睜つて、安樂椅子の傍へ坐ると、其處に在つた所天の煙草盆を引寄せ、無遠慮に煙管を取上げて一ぷく吸付けた、

「支那の太公望は甚麽偉い人だか知りませんが、宅の太公望には困るぢやありませんか、那麽で自分は何うする了簡なんでせう」

と音高く吐月峯を叩いた、

「何うするとは？。」

「那麽に毎日ぶら〳〵遊んでゐられるものか居られないものか、那の人には其れが自分にも分らないのでせうか。」

「しかし身體が惡いなら詮方があるまい。」

「嘘ですよ、身體が惡い身體が惡いッて、そりや人間は生身ですもの、誰だつて頭痛もすれば胸の痛む事もありますわ、少しばかり何處かに故障があると云つて、自分は病人だと一概に思ひ詰めて了つて、のんべりしやらりと暮らして居た日にや、壯健な者だッて最後には病氣になつて了ひます、文雄のは自分で自分の病氣を製造してるんです、なあに貴方元氣を出して氣を引立てさへすりや那麽病氣なんか直ぐ

逃出して了ひますわ、何の事はない怠惰者なんです眞個に私は腹が立つて〳〵。」

「むゝお前の議論にも一理はあるがな、それでは何うすれば可いのかな？。」

「何うすれば可いッて、今が働き盛りの二十七ぢやありませんか、會社なり役所なり何處なりと勤め先を見付けて來て毎日出勤すれば可いぢやありませんか、終日河へ行つて釣魚の出來る人間が、奉職が能ぬといふ理由はありませんわ。」

と眼の前に養子の文雄がるかのやうに、疊み掛けて辯じ立てた。

喜代子は十年前の生活、時輔が全盛であつた時の生活、繁々下役の人達が低頭をして來たり、出入の商人等が御世辭たら〳〵自分を敬ひ奉つた其當時の華やかに賑しかつた生活を忘れる事が出來なかつた、そして能る事なら今一度那麼した時めいた暮しが仕て見たいと常々思つてゐるにつけても、養子文雄の甲斐性のないのが齒痒くて堪らなかつた、文雄が今少し確乎した人物で、會社でも銀行でも官省でも勤務先は何處でも可いから、所天時輔の全盛時代の半分程の社會的地位を持つてゐ

たら、此家は甚麽に賑やかだらう、年を取つた自分達夫婦は甚麽に幸福であらうと年中爾うした事許りを考へて多病な文雄の活氣なき素行が癪に觸つて腹が立つて堪らぬのであつた。

「ですから妾、毎度云ふ事ですが、寧その事思ひ切つて、今の中に何うにかして了つたら何うだらうと思ふんですがね。」

「何うにか爲るといふと？。」

「文雄を實家へ返したらとねえ。」

「離別するといふのかな。」

「えゝ、其方が妾達二人のためにも、第一は那の鈴江のためにも幸福だらうと思ひますがねえ。」

「むゝ。」

と時輔は額越の兩眼むッと庭の方を見据えて考へ込んだ。

庭には白い雌雄の蝶が高く低く、ひら〳〵ひら〳〵と舞ふてゐた。

御客様

世には牝雞うたふて牡雞ゝに和するといふ諺がある、時輔も亦其諺から脱れる事が能ない一人で、殊に官を辭して退隱してからは、一つは自分の脚脚不自由な爲めでもあらうが、家政の事は何から何まで一切喜代子任せにして、自分は唯だもう喜代子の謂ふが儘爲るが儘に動いてゐるのであつたが、流石に斯うした一家の重大問題になると、時輔も一概に　の言葉にのみ從ふてゐる譯にはゆかなかつた。

「しかし春江といふ子まである仲を爾う〳〵輕卒な事も出來んから喃」

と時輔は術なさうに云つた。

「そりや春江には可哀さうですけれども、これが母親の方を離緣するんぢやなし、父親の方だとして見るとたとへ繼父にかゝつても　樣なに苦勞なもんぢやありませ

んわ。」

と喜代子は夫の言葉を說破して、

「それに幸ひに鈴江は那麼好い氣質の女ですし、縹緻も十人並を越へてゐますし、此家だつて此の等寺院では誰知らぬものゝない家格ですから、貰はうと思へば何時だつて養子に來者は何程でもありますから。」

「ふむ、爾う云つて了へば爾うぢやらうが、文雄を實家へ歸すと云つても、お前も知つてゐる通り、彼は元來親も兄弟もない孤兒であつたのを松本の世話で私が生涯見放さぬといふ約束で引取つたのぢやから、今更病氣に成つて、氣に入らぬからといつて離別することは、私として何うも松本に對しての……。」

「貴方は何時でも爾う仰しやるけれど……。」

と喜代子は顏を顰めて、又煙草を一ぷく喫んだが、細く長く煙りを吹き出して、

「恁麼ことがあるにつけても思ひ出すのは對の與四郎です　彼奴さへ那麼道樂者

でなく眞面目な人間でしたら、何も爾う他家から養子を爲なくつても、此家の血筋を引いた者でもあり、彼を養子にさへ爲て置けば何もイザコザはなかつたのですが思ふやうには行かんもので、彼は那麼無賴漢者で今では何處に何うして暮してゐるかも知れない程ですし……。」

と獨り語のやうに云つて嘆息した。

與四郎といふのは先年此世を去つた喜代子の妹の子で、普通ならば喜代子が此北川家へ貰ひ受けて相續人とも爲る筈であつたが、與四郎は最う十七八の頃から放蕩の味を覺え、今日は宮川町明日は久斗町と遊里の酒に性根を失つた末、今から十二年前、彼れが二十一歳の時家出をした儘爾來杳として行衛は固より生死の消息もないのである。

時輔は恁麼蒼蠅い妻の愚痴は聞き度くはなかつたが、其でも素直に調子を合はして、

「うぢやのう、與四郎が居れば何の事はなかつたのぢやが、兎角世は意の如く成らぬものぢや、それは爾うとして、春江の姿が見えぬやうぢやが？」

と彼は態と話しを他に紛らさうとして四邊を見廻した。

「先刻鈴江が伴れて仁和寺の御大師さまへ參詣しましたよ……、眞個に鈴江も可哀さうに、那麼腑甲斐のない亭主を持つてゐるものだから、妾達へは氣兼を爲る、自分は苦勞をする、何うかして亭主の身體を強壯にせうと思つて、一同に氣兼をしながら那麼して信心をしてるのです。」

「むゝ彼女は感心ぢや。」

と時輔は我意を得たりといふやうに頷いた。

折しも庭づたひに下女のお釜が走つて來て、

「奥樣、お客さんがおいでどすえ」

と二巾前垂で濡手を拭き〳〵來客を報じた。

「お客さまつて何方だえ、お名前は？。」

「お名前は岡田とか仰しやりました。」

「岡田？甚麼人？。」

「背丈の高い、色の黑い、立派な洋服を召た、金時計をさげた强さうなお人です。」

岡田といふ姓は、今現に噂をしてゐた與四郎の苗字なので、喜代子は思はず色を動かして、

「貴方、若しや與四郎ぢやありますまいか、眞逆とは思ひますが……。」

と云つた儘、喜代子は急に立つてバタ／＼と玄關の方へ駈出した。

南洋名産

喜代子が周章たやうに玄關へ出て見ると、其處には體格な立派な年齢三十二三の洋裝の紳士が立つてゐた。

「やあ伯母さん、お久しうございます、僕は與四郎です。」

と紳士は懷かしさうに聲を掛けた

「おゝ與四郎、まあ何うしたんだへ、今も旦那とお前の噂をしてゐた處だよ、眞實に何うお仕だつたのだへ。」

と喜代子は狂喜の聲を揚げた、

「伯母さん何うも申譯がありませんお話は追々致しますが、僕は今まで外國へ行つて居たのす、そして昨日神戸へ入港した汽船で歸朝したのです

「まあ爾うかい、それ／＼　さあお上がり、其樣所に立つてゐたッて詮方がない、丁度伯父さんは御座敷の椽側にお居でだから」

喜代子は先に立つて蜘の與四郎を座敷に案内し、

「貴方、噂をすれば影がさすつて眞實ですよ、與四郎が歸つて來ましたの、今まで外國へ行つてゐたんですつて」

「何ぢや、與四郎が歸つた？。」

「えゝ、それは〳〵見違へるやうに立派になつて、貴方見てやつて下さい、恁麼に成つて歸つて來ました。おほゝおほゝ。」

やあそれは〳〵。」

時輔は不自由な片脚をエンやらやつと、安樂椅子から降りた。

「伯父さん與四郎でございます、其後は非常に御無沙汰致しまして何とも申譯がございません、詳しいお話は追々致しますが、實は彼の際、偶と發奮する處がございまして、單身南洋へ出稼に參りましたので、はい、爾來十餘年、成功といふ程ではありませんが、今日の處では先づ何うやら斯うやら事業の方に目鼻が附きましたので所謂故郷忘じ難し、伯父さんや伯母さんが何うしてお居でなさるかと、頻りにお懷かしく成りましたやうな事で、はい。」

與四郎は底力のある聲で、時輔に一別以來の挨拶をするのであつた。見れば風采

も堂々として什麼も南洋邊りで成功して來た人のやうに見えた、

「むゝ爾うか、俺は又何ぢや、彼時ッ切りお前の消息がないので、まだ何處かを遊び廻つてゐるのぢやらうと思つていたのぢやが、まあ結構々々、爾うして奮發をして南洋までも出掛けたとは見上げたものぢや感心々々。」

「いや爾お褒にあづかると、實に汗顏の至りです。」

と與四郎は一寸頭を掻いたが、其傍で欣々茶を入れてゐる喜代子を顧み、

「ところで伯母さん恐れ入りますが玄關に鞄がありますから一寸持つて來て戴きますまいか、何かお二人の御氣に入るやうな御土産をと思つたのですが……。」

「あいよ今直ぐ持つて來ますよ。」

と喜代子は所夫と甥に茶を出して、直玄關から、形の鰐皮の鞄を提げて來た、

「何が入つてゐるのか知らないが、大層重いわねえ。」

「えゝ詰まらん物ですが、本のお土産の形式に持つて來たのです。」

と興四郎は鞄を引き寄せ、中から南洋名産の品々を取出して其塲へ列べ立てた、

「伯父さんには恁麽物はお氣に入るか何うだか存じませんが、遠い所から持つて来た丈が花です、はゝゝはゝゝ。」

「まあ恁麽に澤山いろ〳〵と！、可いのかい興四郎恁麽に貰つても？。」

と喜代子の顏は滿足に輝いた。

文雄の不平

時は花の盛りの陽春四月、天も地も兒渡す限り春の氣分に充ち〳〵てゐる中に、別ても北川家の十疊の座敷は常になく活氣立つて、歡喜の笑が外に洩れた。

軈て二つの呑物膳が時輔と興四郎の前へ運ばれ、喜代子が心盡しの急拵への、田舍料理や、最寄の仕出し屋から運ばれた、甘煮燒肴なぞが出る、喜代子は主客の間を周旋しながら嬉々として笑ひ、欣々として語つた。昔時から酒量のある興四郎は

勸められるまゝに引受け〳〵、快濶な聲で伯父伯母に種々と話した。無論其談は過去十年間の自分の經歷談や苦心談で、喜代子は酌をしながら鎔けるやうな眼をして其れを聽いた。

興四郎自身の語る處では、彼は一旦發奮して家出をするや、僅少な旅費を携へて先づ支那の上海に渡り、二年間理髮人の下職になつて働いた上多少の金を貯蓄し、それを旅費にして今度はシンガポールに渡航し、其處で又二年間種々の勞働をして多少の資本を造り、其れから南洋マニラへ渡つて最初は小さな日本雜貨店を開いたが、運に叶つて漸次に發展し今では同地在住の邦人何某と合資でデパートメントストアーのやうな舗を開き、自分は其業務擔當員として奮鬪してゐるので、今度歸朝したのも、一つは其社の爲の日本離貨の買入に來たので、昨日神戸へ上陸すると、取り敢ず同地諏訪山の南洋ホテルへ投宿し、當今はホテルに滯在の見込みである。

時輔は成程々々と云つて、其れ程までに深い興味も持たずに其成功？談を聽いて

ゐたが、喜代子は恁麼談を聞かされて殆ど狂せんばかりに喜んだ、そして自分の甥の爾うした成功を所夫時輔の前に誇るの色が明々と見えた。

「いや感心々々、まあ！〜精出して勉強しなさるが可い、若い時は二度とはないから喃、俺のやうに斯う身體か不自由に成つては最早末路ぢや。」

と時輔は白い頤髭をしごいた、

「なあに其樣な事はありません、お脚は御不自由でも、伯父樣は中々御元氣ですから未だ〳〵是れからです。」

と與四郎は如才のない世辭を云つて、恭しく自分の杯を時輔にさしたが、何か思ひ付いたやうに四邊を見廻し、

「しかし御家族は是れ切りですか。」

と訊ねた。

喜代子は待つてゐたやうに膝を進めて、

「いゝえお前、妾達は最う半隱居ですよ、養子もあれば嫁もあり、孫まで出來て伯母さんは祖母樣と云はれる身分さ、おほゝゝ、何しろ十年といへば一昔だからねえ。」

と是れから養子文雄を貰つた事から、嫁の鈴江を迎た事、養子も嫁も孤兒同樣の親戚の少い身の上である事などを、其れから其れへと話た上、平素胸に鬱積してゐる文雄の不平を列擧した、

「あゝ爾うですか、そりや大勢で賑やかで可いですな、しかし何です、その文雄さんといふのゝ多病なのはお困りですね。」

「困るにも困らないにも、先刻も其事で伯父樣と二人で相談してた處なんだよ、其處へ思ひ懸けなくお前が斯うして歸つて來たのは、何だか天の祐が降つて來たやうな氣がしますよ。」

「いや個のお役にも立ちませんが、私で叶ふ事なら何でも御相談致します、これで

十何年前には隨分伯母さんに御苦勞を掛けた方ですからね。はゝゝはゝゝ。」

と與四は盛り上つた兩の肩を搖つて高く笑つた、其岩疊らしい體格や、意志の强げに見える兩の眼の光やが、養子の文雄と較べては猛虎と小辛ほどの相違で、喜代子は實に何とも云へぬほど糠母しく思つた。

嫌な人

喜代子が鳥渡臺所へ立つた時、春江を背に負ふた鈴江が歸つて來た。

「おう鈴江さんお歸りかい、おや春江ちやん阿母樣におんぶかい、さあ早くお婆さんのとこへおいで、好い物をあげるから。」

と孫を麼いで、

「御室は今日も隨分人出があつたらうねえ、毎日恁麼にお天氣が好いから、

と立て續けに喋り立てた。

「はい最う大分出て居りました」

と應へたが鈴江は平常にない養母の機嫌の好いのに一寸驚くと同時に、お釜と二人で忙しさうに立働いてゐるのや、臺所一杯に皿小鉢や吸物碗の箱などの取亂されてあるのを見て、

「お母さん何方かお客樣ですか。」

と先づ何より先に訊ねた。

「あゝお客だよ。」

と喜代子は嬉しさうに含笑んで、

「何時かお前にも話した私の甥でゝ昔時は放蕩者で仕方のなかつた與四郎がお前、改心して立派な紳士に成つて歸つて來たんだよ、私も餘り立派に成つてゐるので驚いたんだよ、おほゝ、今お座敷でお父樣と御酒が始まつてるから、お前も鳥渡挨拶をしてお呉れ。」

と喜代子は其儘春江の手を曳き、

「さあ〳〵春江ちやんも小父さんにお目にかゝらうねえ、鈴江さん直ぐにねえ、なあにお前他人ぢやなし、服裝なんか其儘で結構です、早いが何より〳〵。」

斯う云ひ捨てると、喜代子は春江を伴れてバタ〳〵と奥へ行つた。

鈴江は爾うした初對面の人の座敷へ出る事は餘り氣が進まなかつたが、養母の機嫌を損じては大事であると手早く衣紋をつくらふて其跡から座敷へ行つた。

孫の春江を自分の膝の傍へ坐らせてニコ〳〵してゐた喜代子は、それと見るより

「與四郎、これが今話した嫁の鈴江です、何うぞ是から懇意にしてお呉れ。」

と鈴江を與四郎に紹介して、末座の方から挨拶をする鈴江に、

「鈴江さん、其樣な處に居ないでモット此方へおいでなさい、何も遠慮をすること は要りません、水入らずの一家中だもの。」

と云つた、

「はゝゝ全く爾うです。」

と與四郎は調子好く、

「伯母さんからお噂及びでせうが、私は此家の伯母樣には散々御厄介に成つた與四郎です、何うか御見知り下さい、さあずッと此方へ、それでは反つて私が痛み入ります」

と什麼にも交際なれた口調で他を反らさぬのであつた。

けれども其立派な體格や、眼の底に何となく凄い光の煌めくのが、鈴江の頭腦へ、

「あゝ嫌な人！。」

と直覺せしめた。

鈴江がこの一座へ列ると、與四郎は今までよりも更に元氣な聲を出して得意の南洋談を滔々と辯じた、そして折々鈴江の方を見るやうな見ぬやうな眼で窃み視た。

其中に時輔は最早そろ〳〵與四郎の談にも飽いたらしく、酒もいやに成つたらしく、一つ欠伸をして、

「何うぢや鈴江、御室の櫻は今日あたりが盛りぢやらう。」

と鈴江に話し掛けた。

「はい只今が眞ッ盛りでございます、こゝ四ッ日が見頃でせう、お父様もぼつ〳〵行つて御覽なすつたら如何です。」

「俺かな、はゝゝ、脚がこれぢやから嘸、中々入仕事ぢや。」

「妾お手を曳いて參りますわ。」

「お父様が御室まで行らつしやるには、二時間もかゝるだらう。」

と喜代子は笑つた。

「春ちやんも、はァちやんも。」

と春江は最う行く氣になつて喜代子の傍から離れて立上つた。

自働車

花の山二丁登れば大悲閣。その花の山は最早盛りが過ぎて、風吹く毎に花は枝に堪らず、紛々として時ならぬ雪を飛ばした、ひら〳〵片々と美しく、前の大堰の川の水に漂ひ流さるゝ風情、春や日本一と銘打たれたこゝ嵐山ならでは見られぬ眺めである、盛りは過ぎても花は散つても、日曜でもないのに今日も花見の男女はそれから〳〵と押寄せた、今日を晴れと着飾つた女達の衣裳の綺羅美やかさは燦然として人の目を眩ずるばかりであつた。

爾うした歡樂場の狀態を他事に見て文雄は渡月橋の袂から河原へ下り、水清き堰川へ綸を垂れて太公望を氣取つたが、何時まで經つても目的の鮠は愚か、雜魚の子一尾も餌に附かぬので、彼は橋を中心として、上流へ行つたり下流へ行つたり其處此處と場所を變へて見たが、それでも矢張り釣れなかつたので、流石の男も業

を煮やした、

「ちえッ可けない、何うして恁麼に食はないのだらう。」

と思はず獨語をして、さッと長い釣竿を取直した、

「矢張り場所が惡いんだ、餘程機會が好くないと此處邊らでは釣れないんだ、何うしても梅津まで出懸けなきや不可だ、むゝ梅津へ行かう梅津へ」

梅津といふのは渡月橋からは遙に下流、桂川に沼ふた村落で、其處には彼が〻出掛ける好い釣場所があるのだ

時計を見れば正午には未だ少し間があつた、文雄は手早く竿の接目を解いて袋に納め、身支度もそこ〳〵に河原から往ゝへ上つた。

一刻も早く目的の場所へ行かんものと、文雄は竿袋を肩に、蟻の這ふやうにぞろ〳〵ぞろ〳〵と繋がり歩く花見客の間を縫ふやうにして、渡月橋の東詰を下流の方へスタ〳〵急いだ。

其時、長閑な春の空氣を亂して、花に浮かるゝ人の心を壓迫するやうなけたゝましい音を立てゝ、下嵯峨の方から一臺の自働車が疾走して來た、文雄は危く其自働車に衝突しやうとしたので、素早く左の方へ身を交したが最早遲かつた、あッと云ふ間に自分の身體は二間許り刎飛されて揑と路傍へ倒れた。

「やッ危い！。」

「ド、何うした〳〵！。」

人々は口々に叫んで、この不意の災難に遭つた文雄の周圍を取圍んだ。

大丈夫です。難有う、お庇で大して怪我ありません

と云つて文雄は、漸く身を起したが、足の先からは眞紅の血潮が流れてゐた。

十間許りも行過ぎた自働車は直ぐ運轉を止めて、車上からは運轉手と一人の紳士がヒラリと飛降り、人々を掻分けるやうにして文雄の傍に駈寄つた。

一貴方お怪我はなかつたですか、おう血が出てるやうですね。」

「出合頭とは云ひながら、誠に何うも申譯がありません」

紳士と運轉手は右左から言葉を掛けて過失を謝した。手拭を引裂いて足の先の傷に繃帶をしてゐた文雄は、

「なあに少し許り、過失なら詮方がありません」

と云つて偶と顏を上げたが、

「いや實に相濟まんことで、此邊に醫師はないでせうか、何ならお供を致しませう歩けますか貴方。」

と云ふ紳士と顏を見合し、

「おう君は山崎君ぢやないか。」

「文雄君だね、こりや奇遇だ。」

二人は双方から叫んで思はず手と手を取り合つた。

友達同士

一人は最新流行の洋裝をしたハイカラ紳士、一人は縞の着物に白いメリヤスの股引を穿いて草鞋穿の釣魚裝束、而も自働車で怪我さした者と負傷した男とが手を取合ふての立話にさらぬも物見高き都人は興ある事に思つて、遠卷に二人を圍みつゝ見物してゐた、そして口々に囁いた、

「何うなる事かと思ふたら、二人は友達同志らしいやないか。」

「爾うやない、御一人と家來やろ。」

「其樣な事があるものか、君々て云ふてるやないか、那の怪我した方が。」

「喧嘩にでもなると面白いと思ふたのに、これでは詰りまへんな、阿呆らしい。」

恁麼言葉がちらちよい〳〵と耳へ入るので、山崎といふ紳士は少し顏を顰めて、

「しかし僕の自働車で君を負傷させるとは實に思ひ懸けない事だつた、まあ恕して

吳れ給へ。」

「なに其樣な事は些とも構はんが君は今何處に居るのだ今日は見か。」

と文雄は訊ねた。

「むゝ見だ。詳しい事は追々話すとして、何うだい文雄君、君差支がなけりや那の自働車に乘らないか、僕等の行く所へ一緒に行つて、そして一別以來の話を爲やうぢやないか。」

「ふむ、行つても可いが……。」

と文雄は自働車の方を見た、自働車の上には何れは祇園邊りの花らしく、紅紫の色彩が美しく見えた、

「しかし迷惑だらう、折角の君の遊興を邪魔するやうで。」

「何の、其樣な事があるものか、御覽の通り一行は女連許りで、男の話し相手がなくつて寂寥く思つてゐた處だから丁度好い、君は釣魚にでも行く容子だが、釣魚なんか何うでも可からう、今日は僕に附合ひ給へ、はゝゝ足が痛むかね、飛だことを爲たねえ。」

「なに大丈夫だぢや、お言葉に甘へるとせう、しかし何處へ行くんだ？。」

「三軒家か溫泉か、何方かと思つてるんだが……悠々するには溫泉の方が可からう、彼處から舟を雇ふ事にして。」

「何處でも可い、僕は久し振りで君と語れば可いんだ、最う彼時から八年に成るせ。」

「爾うだ、光陰は早いもんだね。」

恁麼話をしながら文雄は山崎の自働車に乘つた、自働車は又奇聲を立てゝ三軒家の方へと砂烟を立てた。

軈て自働車から降りて三軒家の前から舟を雇ふた一行は、水清き大堰川を上流へと逆上つた、山崎の伴れた女連れといふのは、最初に文雄が思つた通り祇園町の藝

妓で、一人は年齢二十一二、お納戸地のお召の二枚袷に織物の帶、髪を島田に結ふた細面の愛嬌のない女であつた、一人は十四五の舞妓で、これは赤いづくしの身の扮裝、頭はお定まりの鴛鴦、金魚の尾のやうな赤い帶を長くだらりと結んでゐた、今一人は謂ふまでもなく茶屋の仲居で、ツンと濟ました無愛想な藝妓に比べては、丸顔な愛嬌者であつた

曾て藝妓遊びなどを爲た事のない文雄は斯うした人達に交つてゐるのが何となく不安なやうな不快なやうな氣がせぬでもなかつたが、絶へて久しい友と語るといふのが嬉しく、其れらを厭ふてゐる暇はなかつた。

「君は何でも此の嵯峨の近邊の資産家へ養子に行つたといふ事だつたが、其樣な姿をして此邊を歩いてる處を見ると、無論其家に居るのだらうねえ。」

「むゝ爾うだよ、衣笠村等寺院といふ所に居るんで、今は元の吉村ぢやなく北川と云ふんだ。」

「北川か、故郷では君が非常な好い家へ行つたといふ評判だつたよ、何でも土地の舊家でも中々持つてる家だと……。」

「爾でもないがね……。」

舟が彼方の岸へ着くまで、二人の合には恁麽話が其れから其れへと盡きなかつた女達は女達で何か面白さうに小聲で話し合ふて背を叩いたり笑つたりしてゐた、和かひ春の風が徐に頰を撫でゝ、落花は舟の中へもひら〳〵ひら〳〵。

嵐山温泉

硝子障子をはめた九尺の肱掛窓の外は赤松の林でその、松の間から岩に激して流るゝ大堰の川の水の見える嵐山温泉、一室に陣取つた一行は、折柄午刻なので、誂への川魚料理で賑しく晝餉を濟ましたが、山崎は最初から些とも手から盃を離さず、旺んにビールだの日本酒だのを嚼つけてゐた、元來餘り飲まぬ方の文雄は、

食後のサイダーを嘗めるやうにチビ〳〵飲みながら其れに杯手を爲てゐた。

斯うして飲みながら、時々女達にデレ〳〵して見せる山崎の態度を、文雄は否な眼をしてヂロリと見た、それを後には山崎も悟つたと見えて、

「おい〳〵、君達も爾うしてゐたッて詰まるまい、一同で虚空藏樣へでも參つて來たら何うだ、これで僕等は僕等で未だ〳〵なか〳〵話しがあるんだからねえ。」

斯ういつて女達に目配せをした、

「そんなら濟みまへんけれど妾達は暫時なあ姐はん。」

と藝妓は仲居に贊助を求めた。

「あゝ可いとも、行つて來給へ、行つて來給へ。」

と山崎は一同を立たせた。

女達がドヤ〳〵出て行くと、山崎は又獨酌で一杯仰つて、

「さあ是れからは我黨の世界だ はゝはゝ女郎共は蒼蠅くつて可けない。」

と笑つて、

「時に文雄君 先刻から尋ねやうと思つてたが、君は何處か惡いのかい何だか顏の色が好くないやうだが。」

と凝乎と文雄の青い顏を凝視めた。

窓の外には松吹く風の音微に、花の山からは陽氣な笑聲が聞こえた。

この山崎といふのは、名を繁次郎といつて、文雄が十八歳の時郡山の中學校を一緒に卒業した同窓の友で、在校中の兄弟のやうな親しい交はりをしてゐたのであつたが、山崎は卒業後大阪の伯父の方へ行き、文雄ぱ自活の道を求める爲に京都へ出たので、双方から心になく音信を斷つやうに成り、爾來八年間互ひに其消息を知らなかつたのであつた。

その舊友に測らず遇つて見ると、親もなく兄弟も持たぬ文雄は懷かしくてならなかつた、何でも自分の事は殘らず打明談をして、同情もして貰ひたく勵ましても貰

ひたかつた。

「あゝ可けないんだ。」

と文雄は思はず眼を濕まして、

「君にも爾う見えるかね。」

「うむ見えるよ、何うしたんだい文雄君。」

「こゝ一二年、何だか肺が惡いやうで。」

「肺が惡い？」

山崎は思はず眉を顰めて否な顏をしたが、それを文雄が覺らぬ間に直ぐ色を直して、

「それは好くないねえ、しかし其樣なにしてゐられる處では大した程でもあるまい、

「そりや爾うなんだ、其樣な理由で先刻も話したやうに、會社の方も辭して了つて

今では毎日のやうに恁麼に釣魚なんかをして遊んでゐるんだ、詰り病氣保養と云つたやうな譯で」

「爾うか、しかし君は非常な金滿の養子に成つてるんだから、其麼養生でも能るだらう、其れ丈な結構だよ僕なんかだッたら其切りさ、はゝゝはゝ。」

「ところが爾うは能ないんだよ君。」

と文雄は痛切な顏をして熟々友の顏を視た、其色、其眼、山崎の眼には文雄の身に纏ふ暗い影が直ぐ見えた、

その暗い影が見えると共に、山崎は陽氣に面白く暮すべき筈の花見の一日を、恁麼陰氣な友と邂逅つて藝妓や舞妓の笑ひ聲の換りに、肺病患者の泣言を聞かねばならぬのかと思つた。

しかし正直な文雄には、其友の心が釋めなかつた。

支配人

「君、小糠三合持つたら養子になんか行くもんぢやないと謂ふが、全くだねえ。」と文雄は嘆息するやうな聲で云つた。

「はゝゝ莫迦に悲觀したね、そりや其麼な事も謂ふさ、しかし那麼は物の譬へで、一概に爾うとも云へない、君なんか幸福だよ、兎に角土地では誰知らぬものもない舊家で資産家で、お父さんは元高等官だッたといふぢやないか、其樣な家へ養子に行つたのは、天が君に幸福を與へたといふものだよ、何れ他人の家へ行つたのだから生れた我家のやうには行かないよ、けれど養父や養母が君を虐待でも爲るのかい？、眞逆其樣な事はあるまい。」

山崎は文雄の養家先を一概に資産家と思ひ詰めてゐるらしいので、文雄は流石に其れを然らずとは打消し兼た、いや八年振りで遇つた友には自分の養家を資産家で

あると思つて欲しかつた。

「別に虐待なんて事はないが、僕の身體が恁麼鹽梅でぶら〳〵してゐるので、養父や養母の氣に入らないんで、何か僕が怠惰者でゝもあるやうに思つて、始終苦情が堪へないんだ、僕だッて何も好んで遊んでるんぢやない、大に活動も爲たい、社會に乘出して華やかな生活も爲たいが、それが爾うもいかないので、詮方なしに斯うしてゐるんだが、其處が何時でも衝突の原因になるんでね。」

と染々と云つて友の同情に訴へた。

「いや尤もだ、其處が同人同志の寄合だから、そりや爾うした感情の衝突もあるだらう、しかし文雄君、其處が忍耐すべき大切な處だから、まあ〳〵何事も堪へて辛抱し給へ、爾う云つちや何んだか親父さへお芽出度く成つて了へば君の天下だらうはゝゝ、君は手を濡さずして、數萬の家の主になる事が能るのだ、其處に至ると僕なんかは自ら額に汗して働かなきや財産といふものは出來ないんだからねえ、慘

瀧なもんさ、はゝゝ。」

「しかし君は今甚麼を爲てゐるんだい、見たところ僕等と異つて堂々たる紳士の風采だが。」

と文雄は今更のやうに自分の身邊を見た。

「僕かい？。」

と山崎は少し反身になつて、見る〳〵得意の色が顏に顯れた、

「これでも會社の支配人さ、僅か三十萬圓の小會社だけれど、年一割以上の配當をする有望な會社だよ。」

「そりや好いねえ、何といふ會社だい？。」

「土地建物會社といつて、僕の伯父が大株主で社長さ、土地の賣買やら貸家の建築なぞをするのが事業で、中々利益があるよ、大阪にも此種の會社はにもあるが、僕の處が一番信用がある、現に北では池田近在一帶、南では天王寺の東から茶臼山

の南彼の邊には我社の經營に成る土地や家屋がズラリと有るんだ、爾うした社の支配人といふんだから、是で中々多忙だよ、今日は日曜だから斯うして京都の花を見に來たけれど。」

と山崎は滔々と述べ立て、手を伸して床の間の亂れ箱から金時計を取上げ、それを文雄に見よがしに眺めて、

「おう何かと話してる中に最早三時だ。」

と時計を下に、

「時に僕は今夜この溫泉で泊つて行くんだが、何うだい君も泊つて行つちや。」

と暗に文雄を追立てるの口吻、

「僕は爾うしちや居られない、小糠三合だからねえ、はゝはゝ。」

「爾うか、ぢや歸るかね？。」

「むゝ歸るとも、其で山崎君、君の會社だねえ、その會社へ僕のやうな者でも使

つて貰へるだらうか？。」

「好いとも、君の事なら何時でも可い、僕が伯父に爾う云つて直に世話する、一遍大阪へ來給へ、僕の家ば櫻の宮だから、彼の邊で聞くと直ぐ分かるよ。」

と山崎は調子好く恁麼返答をした。

山越の路

それから二時間程して、山崎に別れて嵐山温泉を出た文雄は、御室と北嵯峨の通路、山越への寂寥い道を、竿袋と魚籠をかたげてテク〳〵歩いてゐた、自働車で負傷した足の先がチク〳〵痛むので、汽車に乘らうと思つて停車場へ行つたのであつたが折柄停車場は花見歸りの男女が人波打つての大混雜、それを見た彼は爾うした雜踏の中へ混るが蒼蠅く、急に踵を廻らして停車場を出で、北嵯峨から廣澤の池を左に見て、この山越をして歩いて來たのであつた。

右を見ても松山左を見ても松の山山と山との間の寂しい道を只一人歩いてゐると、文雄はつい種々の空想に耽らずにはゐられなかつた。

彼は八年振りで同窓の山崎に測らず遇つたのは嬉しかつたけれど、昔の山崎と今の山崎とは何となく人が異つてゐるやうで言葉の調子も好く愛想も惡くはないけれども、舊友に對する温情といふのが少いやうに思はれて、彼は其を非常に物足らないやうに思つた。

けれど、山崎は中々才子だ、あの體格から言語應對、それが全然現代的に出來てゐる、竪から見ても横から見ても寸分の隙のない常世紳士だ、あの活氣ある態度で一會社の支配人として活動してゐる彼、日曜の一日を藝妓を伴れて花見に暮らす彼、同じ學校を出た身で、自分と彼とはうして恁麼に境遇が違ふのであらう、これが人々に持つて生れた運命とでも謂ふのだらう……。」

穴勝に全盛の友を羨むのではないが、文雄は今の我身に較べて我知らず恁麼こと

を思つた。

「あゝ僕も何時までも斯うしちや居られないぞ、早く社會へ出て活動しなげりやならない、何程病氣だつて何だつて、人間身體の動く間、ぶら〳〵遊んでゐるのは能ではない、養父や養母が自分を腑甲斐性なしといふのも無理はない……。」

と文雄は自分を叱つた、勿論、彼とても好んで毎日釣魚ばかりに日を暮らしてゐるのではなかつた、例令病身であるまでも、養父母への手前、去年下京の會社を退社してから此方、官吏の口やら曾社員の口やら、それ〴〵手蔓を求めて諸方へ勤め口を掛て置くのであつたが、折角今まで成功しかゝつたものが、何時も彼の多病であるといふのが破談の口實に成つて、未だ今日に至るも然るべき勤め先が見付からぬのであつた。

彼は歩き〳〵、斯うして何時までも浪人をしてゐて一方自身の病勢が進んで行つたら何うなるだらうなどゝ心細い事を考へた、養父は兎に角、養母が自分に對する

あの眼光、箸の上下にもツケ〳〵嫌味ばかり云はれる辛さ切なさ、

「あゝ四面楚歌の聲！。」

と彼は思はす高く叫んだが、忽ち、

「いや爾うぢやない、俺にはがある、子がある　妻や子は敵でない味方だ、四面楚歌の聲ではなかつた!!。」

と思ひ直して莞爾と笑つた、そして妻の鈴江が養父母と自分の間に立つて、謂ふに謂はれぬ辛い思ひをしたり、氣兼氣苦勞をしたりして、心細い自分の身を庇護してくれる志を嬉しく思つた。

恁麼事を思ひながらいてゐる中、春の日は最う暮なんとして四邊がだん〳〵薄暗くなつて來た、何處からともなく夕暮の鐘の音が物淋しく聞こえた。

丁度其時、彼は此邊の名所の一つに成つてゐる帶解池の邊を歩いてゐたのであつたが、突然其池の岸近く黄昏れて木下暗に成つてゐる湧で　低い聲で人の泣く音が

聞えた、彼はハッと思つて我知らず立竦んだ、そして眸を据て其聲の力を凝乎と視た。鐘の聲、風の音。

松の下枝

じッと耳を澄してゐると、怪しい人の泣き聲は、自分の立つてゐる五六間先の、松の木の下から確に聞こえるのだ。

「あゝ〳〵、身から出た錆とはいひながら故郷へも歸れず、とう〳〵斯うして……。」

と什麼も殘念さうに云つて、後は又泣くらしい。

「やッ身投げだ！。」

突差の間に斯う思つた文雄は、最う躊躇してはあられなかつた、身を飜すが否や、道路の左側、熊笹生茂る中へガサ〳〵と入つて、

「誰だ、其處に居るのは誰だ？。」

と聲を掛げながら近づいた。

四邊は大分黄昏て、木の下闇は殊に暗かつたけれど、其れでも其處に立つてゐる人の風采容貌は能く見えた、年齢は二十一二、夕暮の薄い光線で見る故でもあらうが白いといふよりも寧ろ眞青な細面の美男子で、縞物らしい着物に同じ袷羽織を被つたのが、今しも自分の帶を解いて松の下枝に掛け、それに片手を掛けて已に縊死を遂げやうとする處である。

「おい、君、ナ、何をするんだ、首をくゝるなんて待ち給へ、待ち給へ。」

と文雄は其男の身體に抱付くやうにして其場へ引据ゑた、

「ド誰樣でございますか、何うぞ此儘お見逃しを……。」

と男は涙を拭いた、

「莫迦な、見逃がせなんて、恁麼ことが見逃せるもんですか、全體君は何うして其

様な氣に成つたのですか？、何うせ恁麽淑しい所へ來て一人で死なうと云ふんだから、深い事情があるには相違なからうが、そりや餘り愚ですせ君。」

「……。」

「人間死といふ事は容易な事ぢやない、それを自ら決行せうといふには非常な煩悶があるんでせう、それはお察しするが、自殺なんて　餘り無分別です、しかし何うしたのです君何故恁麽ことを爲る氣に成つたのです？。」

「はい、有難うございます……。」

と男は若い婦人がすがるやうに兩の袖口で交はる〳〵涙を拭いた、それが什麽も哀れに弱々しく見えた、

「まあ恁麽事情か構はぬなら話して御覽なさい、及ばずながらお力になる事が能るかも知れない。」

と文雄は男の前へ蹲踞んで、覗くやうに泌々と瞻入つた、そして心の裡で、這の男

も或は自分のやうな境遇に居る人ではなからうかと思つた。

男は涙を拭き〳〵、少時默つて首を垂れてゐたが、やう〳〵顔を上げて、

「あゝ私が悪うございました、貴方がお助け下さいませんでしたら、私は最うこの松の木にぶら下つて死んでゐる處でした、有難うございました、お庇で、命一つ拾ひました……。」

「むゝ、それでは死ぬ事は思ひ止まつたのですね。」

「はい有難うございます。」

「全體まあ何の爲に其樣な氣を起したのです？、眞逆此頃流行る青年の悲觀病でもないでせう、え君、構はぬから話して御覽なさい、僕も男だ、貴方の不名譽になるやうな事は決して他言はしません。」

「實は、實はお話し致すのもお恥かしいことですが……。」

春とはいへど夕暮の風は冷く、四邊は漸次々々に暮れて行くのであつた。

歸る旅費

文雄は四邊を見廻し、

「しかし君、最う死を斷念したとすれば何時までも恁麼所に居る必要はない、第一暗くて寒くて仕方がない君は何處の人か知らないが、何れ京の方でせう、僕は御室の先の等寺院といふ所まで歸るものですから、其邊まで一緒に歩きながら話しませうまれとも君は嵯峨の方ですか。」

と起ち上がつた。

「いえ爾うぢやございません。」

と男も起ち上がつたが、自分の帶を解いて松の枝へ掛けてゐたので、慌てゝ前を搔合せた。

「それでは一緒に行きませう、早く其帶を、誰か人でも迚ると可けないです。」

「え、え。」

と男は手早く其帶を取つて自分の腰へ卷付けた。

癮て二人は肩を並べて歩き出したが男は絶えず俯向勝に、死ぬ氣に成つた身の來歷を話した。

「實は私はこの京都へは始めて參りました處で……。」

と云つて、男は歩きながら深い溜息を吐いた。

「あゝ爾うでせう、君の言葉が何うも京都ではないらしかつた。」

「えゝ東京の者ですが……、宅は客な商人でございます、私は其家の長男で、一月程前に、店の金を五百圓持つて商用で大阪まで行つたのですが、一度京都見物がして見たいと思つたのが間違ひの原で、取引先へ渡す金を懷中にした儘、この京都へ來て四條の或宿屋へ泊りましたが其晩其家の番頭に案内して貰つて宮川町といふ所の青樓へ遊びに出掛けたのです。」

と男は又溜息を吐いて、

「其晩に呼んだ藝妓の中に、君葉といふ女がありましたが、私は何う魔がさしたものか、全然其女に打ち込んで了ひました、東京の親父や阿母の事も、商用の事も、大阪の取引先の事も、何も斯も全然忘れて了つて毎日君葉を伴れて彼方此方と遊び廻つたのです、そして僅か一ケ月程の間に五百圓の金は悉な使つて了つたのです……あゝ、失策つた、と氣が付いたのは最う遅かつたです、はい一文なしに成つた私は何うする事も出來なくなりました、着換の衣類や二つ三つの所持品は悉な賣つて了ひ、宿屋の方にも大分借金が出來て追出される、この京都中に誰一人知つた者はなく、途方に暮れました餘り、那麼に最負にした女だからいゝと思つて、男らしくもなく、一昨日宮川町へ出掛けて行つて君葉を呼び出し、今までの馴染甲斐に東京へ歸る旅費を十圓ばかり貸て呉れッて頼んだのですが、難なく刎付けられました……天で相手にして呉れませんでした……あゝ京都の女は薄情です……、い

え其樣な事を思ふのも間違ひです……それで一錢の金もなくなり、昨日から泊る處もなく、お恥かしい事ですが、實は食事もせず、御覽の通の恁麼見すぼらしい風采をして、目的もなく無暗矢鱈に歩き廻つて居りましたので……、先刻今の所まで參りますと、急に死にたくなりまして。」

と男はほろ〳〵涙を零した

文雄は今まで少しも氣が付かなかつたが、恁麼話しを聞いて見ると、男の兩の眼がおそろしく凹んで、話しをする聲がかすれて底力がなく、什麼にも切なげに肩で呼吸をしてゐる容子が、成程昨日から食事も取らずに飢えてゐるのであらうと分かつて謂ふに謂はれぬ物の哀れを感じた。

「あゝ其れで死ぬ氣に成つたのですか、知らぬ他國で其樣な目に遭つたら、死んで了ひ度なるのも無理はないです。」

と痛切な聲で相手に同情して、

「ぢや何ですね、君は東京へ歸る事が出來れば可いんですね」

「えゝ、歸つて親父に今度の不心得を詫さへ致しましたら……しかし……。」

「歸る旅費がないと云ふんでせう、それは僕が進げませう、君の自殺を止めたのも何かの御緣でせう、失禮ですが旅費は僕が進げます。」

時計と蝦蟇口

「いえどゝ何う致しまして、命を助けて戴いた上に旅費まで頂戴致ますなんて、其樣な、其樣なことが何うして……。」

と男はきながら少し身を避けるやうにして辭退した、

「まあ然う云はずに僕に任して置き給へ、出來る事なら是から君を僕の家へ連れて行つて、今夜は悠々泊めて進げたいのだが、實は僕も養子の身で其樣な自由が利かないんですから、兎に角君が東京まで歸ることの出來るだけ都合しませう。」

と文雄は一寸小首を捻つたが、直ぐ自分の帶に卷付けてゐた銀時計と赤銅の鎖を付けたまゝはづして、

「今日は釣魚に行つた歸路で相惡く君の旅費にするほどの持合はせがないですから これを上げますから、賣るなり何うなりして其で旅費を拵へ、一刻も早く東京へ歸つた方が可いでせう。」

「どゝ何う致しまして滅相な、其樣な物を、御親切は頂戴致しましたが何うぞ其れはお納めなすつて。」

と男は手にも觸ず二つ三つ頭を下げた、

「可いんだよ君、其樣なに遠慮しなくつたッて可いんです、僕も此の儘君に別れて了つては佛作つて靈入れずで自分の心が濟まんのです、だから遠慮なく持つて行つて呉れ給へ、君五圓もありや東京まで歸れるでせう、恁麼惡い時計ですが、これでも、れば五圓や六圓には成るでせうから、僕の好意を無にせずに持つて行つて呉れ

給へ。」

はい、しかし其れでは餘まり……。」

君命にかへる場合ぢやありませんか、遠慮も時によるです。」

「はい。」

と男は又嬉し涙を掌で押へた。

「それから待ち給へよ。」

と文雄は懷中から蝦蟇口を出して中を改め、

「こゝに一圓方らずの小錢があるです、これも君に進上しますから、これで何か食べるなり、何處か安い宿屋へでも泊る事にして、泊つた宿屋の番頭に賴んで其時計を賣つて貰ひ、そして少しもはやく東京へ歸る事に爲給へ。」

と蝦蟇口の中の銀貨や銅貨を殘らず出して、時計と共に無理から男の手に握らしたる。

男は唯もう夢に夢見る嬉しさに、兩の眼からぼろ〳〵涙を零しながら、文雄の志を額に押當て戴き〳〵、

「有難うございます、有難うございますこの御恩はシ、死んでも忘れません、お庇で東京へ歸る事が出來ます、有難うございます、では折角の御親切ですからお言葉に從ひまして、

「爾うし給へ、それが可いです、それで僕の好意も徹底するといふものです」

「有難うございます、お庇で東京へ歸りましたら早速御禮狀を差上げ度うございますから、貴方の御名前や番地を。」

「いや、そりや可けない。」

と文雄を頭を掉つて、

「僕は禮を云つて貰はうと思つて君に盡すんぢやないです、だから其れは云ひますまい、又君の姓名も聞かうと思はん、お互ひに緣があつたら亦何處かで逢ふ機會が

あるでせう、今日はお互ひに名乘らずに別れませう。」

「しかし其れでは餘まり……。」

と男は本意ない顏をして文雄を見上げた。

「怎麼問答をしながら歩いてゐる中に、二人は最う山越の山阪道を過ぎて、鳴瀧の橋の袂へ來てゐた、空は全く暮れて愛宕の峰から冷い風が颯と吹き下したかと思ふと、はら〳〵と村雨が降つて來た。

「おや降つて來ましたやうで。」

と男は空を見上げた。

文雄も暮れゆく空を仰いで、

「なあに村雨ですから直ぐ晴るでせう、しかし急ぎませう、御室まで一緒に行つて彼處で別れる事にしませう、君は彼處から花園停車場へ出て汽車に乘つて京の町へ行が可い。」

什麼にも不快

雨は本の一村雨で、鳴瀧の橋から五六丁御室の山門の前へ來た時には最う跡方もなく晴れて了つた。

文雄は仁和寺御所の東の端れでヒタと立停り、男に向つて南の方を指さした、

「ぢや此處で別れませう、此の道を眞直に何處までも行くと、停車場手前の鐵道線路の處へ出ます、其處を左へ行けば直ぐ停車場です、氣を附けてお行でなさい、失敬します。」

「難有うございます。」

と男は幾度も低頭をしたが、最う暮れて人顏も見むぬのか、懷かしげに殘り惜げに文雄の顏を覗くやうにして、

「最うこれでお別れ致しますので……、何だかお名殘り惜しいやうで……。」

と彼は又泣いてゐるのか、頻に鼻を啜る音が聞えた。

「先刻もお話し爲たやうな譯で、僕が養子の身分でさへなけりや、今夜は僕の家へお伴れ申すんだが……、はゝゝ爾う云ふ譯だからマア恕して呉れ給へ、ぢや失敬。」

「それでは是でお別れ致します種々難有うございました、貴方も隨分御機嫌よろしう。」

と男は再度三度頭を下げて、名殘りは盡きねど、寂しい薄暗い御室の町を、振向き勝ちに南へと去つた。

文雄は其儘急ぎ足に等寺院村の我家へ歸つたが、人一人の命を助けて旅費まで都合して遣つたと思ふと、何となく心が欣々として氣が引立つてゐた。

門を入つて臺所所から茶の間へ上ると、後方に茶簞笥を控た長火鉢の前に養母の喜代子がチャンと構へ込んで、長い煙管で莨を喫みながら、折柄臺所で夕餉の後仕

舞をしてゐるお釜と高聲で何か話してゐた。

「只今歸りました。」

と養母の前に低頭をする文雄を、喜代子は險しい眼でジロリと見たばかり。

「しかしねえお釜、幾程若い時は遊樂をしても何でも、いざと謂ふ段には那麼して思ひ切つた事を爲るやうでなけりや、男に生れた甲斐がないと言ふもんだよ。」

と大聲でお釜と話し續けた、

「左樣でございます、へえ。」

とお釜は主人の話しに調子を合せてゐた。

「何うせお前、若い時なら少し位道楽は仕樣ぢやないか、しかし改心して、奮發して遠い南洋三界まで出掛け、行つて、十年も苦勞をした上那麼して立派に成つて來て見りや、今までの罪は消えたと言ふものだよ。」

「爾うでございますとも。」

「ねえさうだらう、自分の甥を褒るのぢやないが、那麽で那の男は前からキビ〳〵した點があつたよ、そりや親類に迷惑も掛けたが、中々の負けぬ氣者で、男らしい男だつたが、矢張りねえ」

「ですから那麽に御立派に成つておりやしたのですわ、へい。」

「爾うとも、妾は男の愚圖々してるのは嫌ひさ、男は何でも竹を割つたやうな氣象ぢやなくつちや面白くない、年が年中泣いてゐるやうな顏をしてる陰氣な男は嫌ひさ。」

と横山でちよいと文雄を視た。

文雄は養母が何の話しをしてゐるのか分らなかつたが、言葉尻に自分に當て付けたところがあるやうで不快に覺えた、いや其れよりも 期うして時を過ぎて歸つて來てゐるのに、自分の膳も出してなければ、誰一人其れを出して呉れやうと爲るものゝないのが什麽も不快で堪らなかつた。

「鈴江は何處へか行きましたか。」

と文雄は四邊を見廻しながら火鉢の前へにじり寄つた。

妻の優しさ

喜代子は忌々しさうな顏をして、

「さあ何處へ行つたのでせう、裏で機を織つてるのでせう……。」

と云つた儘、又お釜の方を見て、

「それにお前體格だつてあの通り立派だから、從つて心も確乎してやうといふので那麽思ひ切つた事も出來たのだらうよ、何だつてお前、一文なしで外國へ飛び出して那麽だけに、成つて來やうといふには、並や大抵の事では可けないからねえ。」

左樣でございます、爾う思ふとあの御方樣お偉いお人ですなア。」

とお釜は何處までも合槌を打つてゐた。

「偉いか偉くないか、其處の處は妾にも分らないけれど、まあ那麼して歸つて來て見れば、餘まり惡い氣も仕ないからねえ」

「そりや奥樣爾うでござりますとも世の中に何が何んだと云つても血を分けた親子ほど懷かしいものはござりませんさかいなア。」

「爾うだともお前、根が他人であつてゝると、何處やらに水臭い處があるからねえ妾は今日思ひ懸なくあの子が歸つて來たので、甚麼に心が丈夫に成つたか知れないよ、旦那樣には他人でも　妾には切つても切れぬ伯母甥の間だからねえ」

「全くでござります」

文雄は喜代子が恁麼談をしてゐて、更に自分を相手に爲て呉ぬので、手持無沙汰でモジ〳〵しながら、袂から敷島の袋を出して一本吸付けた。喜代子の言葉に時々自分の胸を刺す針はあつたが、何を話してゐるやら分らう筈はなかつた。

「春江が見えんやうですが、最う寢たのですか。」

喜代子の言葉の切れるのを俟つて、文雄は又訊ねた。

「今しがたまで奥で親父さんと遊んでゐましたが、大方其儘親父さんの寢床へ入つて寢て了つたんでせう。」

と喜代子は寒さうな顔をしてゐる文雄の顔を視て、

「今日は何處へ行つたのです、釣れましたか、お前さんが澤山鮠雜魚を持つてお歸りだと思つて、晩の御飯に其を御馳走になる意で、先刻から待つてたのですが、餘まりお歸りが遲いから、殘念ながら先へ濟まして了ひました、ねえお釜」

と又してもお釜の方を視る。

「いえ今日は釣魚は仕ませんでした、途中で偶然郡山時代の舊友に遇つたものですから、其友人と嵐山温泉へ行つてゐました」

と文雄は汗潤り云つて了つて、直ぐ言はねば可かつたと悔んだ。

果せる哉、意地の惡い喜代子は目を丸めて、

嵐山温泉へ？、それは〳〵お樂みでしたねえ、妾等は今年に成つてから、未だ御室の花も平野の夜櫻へも行つて見ませんのに、お前さんはお幸福です。」

と嘲笑ふやうに云つたが、遽に氣付いたやうに、

「おや、話しに身が入つて全然忘れてゐたが、お前さん御夕飯は？、嵐山温泉から、お歸りだといふと、最う濟んだのでせうねえ。」

「いえ未だです、皆な最う濟んだのですか。」

と文雄は態と其邊を見廻した。

所夫の聲を聞付けたのか、鈴江は裏からがしさうに入つて來て、

「おやお歸りなさいまし、貴方先刻の雨にお遭ひなすつたでせう、寒かつたでせう。」

と茶の間へ來たが、文雄の前に未だ膳の出してないのを見て、

「お腹がすいたでせう、今直ぐ進げますよ。」

と立上がつた。

文雄は何時に變らぬ妻の優しさを心に謝した。

話しの最中

北川家には先代が隱居所にしてゐた離れの一棟がある、それは母屋の裏に一間許りの間隔を置いて建てられてある一棟で、數寄屋風に出來た四疊半の小座敷と六疊の納戸とで、それに八疊敷計りの十間が附いてゐる、鈴江は此の土間へ織機を立てゝ暇ある毎にちよい〳〵此の機に上つて御召を織つてゐるのであつた。

當然ならば最う時輔夫婦が此の隱居所へ退き、若夫婦を母家に住まはせるが道であらうに、萬づに勝氣で利かぬ氣で、自分の揮る采配でなければ家は修まらぬと信じ切つてゐる喜代子は、容易に母家の本城を明け渡さなかつた、そして此の離室を文雄の居間なり、若夫婦の寢室なりに宛て置くのであつた。

鈴江は何時も夕方母家の用事が濟むと、この六疊の寢室で春江をねかしつけ、春江が眠て了うと、今度は土間へ降りて、薄暗い吊洋燈の下でカタリ〳〵と更闌るまでお召しを織るのを例としてゐた。

鈴江が機織の內職までせねば、北川家は其日〳〵の生活に事を缺くといふ程貧しくはないのだけれど、鈴江は何事も家の爲め連添ふ良人の爲め出來る限りは自分の身を苦めても、養父母の機嫌とり〳〵に、斯うして骨を惜まず働くのであつた。

其夜更けてから、鈴江は良人文雄に囁いた。

「貴方お母樣からお聞きなすつて？今日お母さんの甥の與四郎さんが急に歸つて見えた事だ。」

「いゝえ些とも聞かないよ。」

と文雄は眼を睜つて。

「與四郎さんていふと、あの放蕩者の行衞不明に成つてゐるといふ彼の人かい？。」

「えゝ然うなの、今まで南洋とかマニラとかへ行つてたのですつて。」

「成程、それで分つた、今夜お母さんがお釜と話してゐた事か、何だか譯が分らんと思つてゐたが、むゝ其の話か、それで分つた。」

と文雄は苦笑と共に頷いた。

「何でも彼地で成功したといつて、立派な紳士風をして見えたのですが……。」

と鈴江は今日與四郎に逢つた模樣を詳しく話して、

「それで今日は、母さんは大層御氣嫌なの。」

「與四郎さんは直ぐ歸つたのかね、此家へ泊らないで？。」

「えゝ神戸の南洋ホテルとやらへ泊つてるんですつて。何れ又明後日あたり來ますからつて、三時頃までもお酒を飲んで醉つてお歸りに成つたのですが、お母さんの甥御さんを、然う云つちや惡いけれど、何だか胸に一物のありさうな嫌な方ですよ。」

「むゝ然うか、其樣な人が來たのか。」
と文雄は何とはなしに凝乎と考へ込んだ。
「お母さんは、其樣なホテルなんかに居ては不經濟だらうから、大概用事が濟んだら此家へ來てゐたら可からうと勸めてゐらしたわ。」
「そして與四郎さんは何と云つたい？。」
「自然其樣な事に願ふかも知れませんが、當今の處は神戸に居ないと都合が惡いです、しかし神戸と京都でゝすから、暇さへあれば蒼蠅くお伺ひしますつてね、歸り際に、恁麼可愛いのがあるとは些とも知らなかつたので、お土產を持つて來なかつたからつて、春江にお金を五圓下すつたの。」
「然うかそして其れは何うした？。」
「ほゝ。」
と鈴江は低く笑つて、

「お母さんが納つてお了ひでしたわ。」
「何の事だい」
と文雄は又苦笑した。
睦まじい夫婦の話しの最中、森と更けゆく春の夜の靜けさを破つて、庭の方に當つて忍び足に此の離座敷の椽に近く人の足音が聞こえた。
「貴方ちよつと！」
と鈴江は耳を澄した。

大久保彦左衞門

「どなた？。」
「誰だい？。」
其中に怪しい跫音は椽の雨戸に近寄つたので、夫婦は小聲であつたが力の强い聲

で咎めた。

「朴平でがす、未だ起きてるだかね？」

「あら爺や、何か用なの」

「朴平か、まあ入るが可い、未だ起きて話してた處なんだ。」

文雄はッと起上つて雨戸を一枚開けた。

「御免なさい、俺ハア少しお前様方に話したい事あるで來たゞ、誰にも内證でねえ

と蒼蠅えでな、態とハア恁麼に更けて來たゞよ。」

と朴平は草履を脱いで密と椽から上つた。

「爺や、遠慮しないで、此方へお入り。」

と鈴江は自分の席を少し譲つた。

「さあ火鉢の前へ來るが可い、春でも夜は寒いからねえ。」

と文雄は自分の前の大形な桐の角火鉢を少し押し出した。

「それでは御免蒙るべいかな。」

と朴平は火鉢の前へ窮屈さうに坐つた、最早六十の坂を越したらしく、頭は胡麻鹽で額に深い横皺を刻んではゐるが、骨格のがつしりとした、而して什麼も正直らしい人相をした好々爺であつた。

鈴江は手早く鐵瓶の湯を急須に移し、

「爺や出からしだよ」

と茶を進めた、

「はい、はい、有難うがす、折角の御親切だで、低頭なしに戴きますだ。」

と彼は茶碗を押戴いてほや〳〵と湯氣の立つ茶を舌皷をして喫みながら、

「俺恁麼に深更くお前様方驚かしたのは他でもねえだが。」

と少しく聲を低めて、

「今日大奥様の甥御の與四郎さんが歸つて來た事に就て、俺ハア少しお前様方に話

したい事あつたで、

「あゝ爾うか、與四郎さんが何うかしたかね？」

と文雄は思はず膝を動かした。

「なあに、何うも爲ねえでがすがね、お前樣方は知るめえが、今日來た那の與四郎といふ人は、箸にも棒にもハァかゝらねえ道樂者でがす、俺はこれでも此家の大旦那樣が御養子に來られる前から、此の北川の家に使はれてゐた者で、この家の事なら何から何まで殘らず知つてゐますだ。」

「爾うだらうね爺やは妾達と異つて此家の生拔きも同じだからねえ。」

と又温い茶を注いで遣つた、

「はゝゝ、爾うでもねえだが、俺は若い時には御先代に御恩を受け、年い取つてからは、斯うして大旦那樣の御恩に成つてゐるで、何でもハァ此家の爲に成ることなら骨も砂利にしても可えと思ふてゐますだ。」

「全く爾うだ、爺やのやうな忠義者は澤斗ない、爺やは北川家の大久保彦左衛門だよ。」

と文雄は心から朴平の言葉に賛成した。

「はゝゝゝ。」

と朴平は嬉しさうに笑つて頓でもない大久保彦左衛門だと腰から古びた煙草入をとり出し古い眞鍮の鉈豆煙管で莨の煙を吹きながらそのハァ大久保彦左衛門がお前樣方お二人に注意サ爲て置きたいのは那の與四郎さんだが聞けば仲でも外國サ行つて偉い者に成つて歸つたゞいふがね、ありや嘘の皮だよ眞逆と鈴江は微笑したいや、大地を敲く槌は外れるとも俺が睨んだ眼は違はねえ、是れからハァ那の男が來て此家サ搔廻さうといふに極つてるで第一お前樣方お二人は油斷をしては可けねえだ

人の誠

世に憎いものは花に嵐といふ、その嵐といふほどではないが、花には禁物の風が出たと見えて、庭には時々梢の搖く音が聞こえた。

朴平は言葉を續けて、

「俺が恁麼ことお前樣方に話したと聞いたら、大奥樣はハア、頭から湯氣立てゝ怒るべつべいが、全く那の與四郎といふ和郎は惡い人だで、お前樣方其意で交ひするが可えだ。指折り數へれば丁度今から十一、二年前だ、那の人はお前樣さん〳〵道樂をした結果、金に詰つて惡い了簡サ起し同じ惡友達と相棒になつて、何とかいふ人を欺して金を奪つたとやら詐僞したとやら、それが露見かゝつて危くお上の御用に成らうとしたが。」

「實際其樣な事があつたのかね。」

と文雄は、嘆息した。

「實際も何も、俺は何も斯も知つてるだ、那の人は其れを嗅付けると、其頃大病でござらした母御を置去りにして、其儘ドロンとを隱して了つたが、何と驚いた人間ぢやないかね。

と朴平は腹立たしげに舌皷をして、

「それをハア苦に病んで、母御樣の病氣は重くなるばかり、間もなくハア與四郎が與四郎がと云ひながら、ゝんで了はしやつたゞ。」

それがお母樣の妹さんなの？」

と鈴江は訊ねた。

「爾うでがす、爾ういふハア和郎だで今度歸つて來たのも、外國で成功したの、金を儲けて來たのといふのは悉な嘘の皮だよ、爾ういふて此家サへ來るには屹と魂丹があるだ。此家の大奥樣とは切つても切れぬ伯母甥だで、伯母樣サ丸め込んで行々

は自分が此家の御主人にでも成る了簡で來たに違はねえだ、そこでソラ、差向きお前樣方二人が目の上の瘤だで、何れ何とか惡巧を爲るに極まつてるだ　だから迂濶して居さつしやらうものなら、飛でもねえ目に遇ふだぞ、轉ばぬ先の杖といふ事があるで、此處ン處を能く考へてな、氣を附さつしやれ、俺ハア是丈のことお前樣方に知らせやうと思つて、大奥樣やお釜の阿魔には知れぬやうに、今夜密と此處サ來たゝよ。」

若夫婦に深い同情を寄せてゐる朴平の親切は言外にまで溢れた、文雄も鈴江も朴平の親切を喜ぶと同時に今にも自分等夫婦の間に大難が降つて來るやうに思はれ、言ふに言はれぬ不安を感じた、爾うでなくてさへも喜代子が文雄の多病のを嫌ふて明かに口へ出しては言はぬけれど、機會があつたら文雄を此家から離別し鈴江には新たに養子を迎へやうと思つてゐる事が、常々から賢しい鈴江には能く釋めてゐた鈴江が養母の心中を知つてゐる位であるから文雄も其れを知らぬ筈はない、山雨至

らんと欲して厘樓に滿つ、今にも何か事が起らねば可いがと思ふ心は夫婦同じ事であつた。

「有難う、眞逆其樣な事はあるまいと思ふけれど、物は用心に如くはない、爺やの親切は屹と此の胸に疊んで置きます。」

と文雄は感謝の眼で朴平を瞻た。

「本統に爺や許りだよ、陰に陽になり妾達を庇ふてお呉れなのは。」

と鈴江は眼を瞬たゝいた。

朴平は板のやうな掌で煙草の吸殼を叩き落としながら、

「何も此家の爲だで、俺別に誰を嫌ふて誰を贔屓にするといふ事ないだが、近頃はハア大奥樣が若旦那を袖にさつしやるのが、日に〳〵烈しく見えるでな、俺若旦那がお氣の毒でならねえだ。」

と朴平は鼻水を啜つて、

「それにハア奥様は朝から晩まで骨身を惜まず働いてゐさつしやるに、それでも大奥様の氣に入らねえだから、俺傍で見る目が辛いだよ。」

文雄も鈴江も、人の誠が身に沁みて思はず涙に暮た。

黄金の光

花三日、三日見ぬ間の櫻の諺にもれず、都の男女が盡せぬ歡樂に醉ふ間に、平野の花も御室の八重も殘りなく散つて、天地は青葉若葉の綠に彩らるゝ時節に近づいた、それでも若葉がくれに殘んの色香を愛ずる人々は、日毎にこの洛西の郊外を賑してゐた。

明後日來ると云つて立去つた與四郎は、何うした譯か喜代子が待ちに待つた其明後日が來ても姿を見せなかつた、喜代子は今日こそは今日こそはと毎日待焦れて、蒼蠅いほど其事ばかりを言ひ續けてゐたが、丁度豫期した日から十日目の午後四時

頃、與四郎は護謨輪の俥で威勢よく北川の門前へ乘付けた。

まあ與四郎、何うしたと云ふんだい、毎日々々人を待ち耄けさせて置いてさ、全體何うしておいでだつたの此人は。」

と喜代子は彼を玄關に迎へると直ぐ斯う云つた、而して手を取らんばかりにして、

「さあ〳〵早く奥へお通り、伯父さんも甚麼に待つておいでだつたか知れないよ。」

と座敷へ案内した。

其實時輔は決して與四郎の來るのを待つてゐるのではなかつた、然し斯うして來て見れば喜代子の手前、流石に無愛想な顔は爲得なかつた。

一渡り挨拶が濟むと、與四郎は金口の莨の火を點けて、薫りの高い煙を燻らしながら、

「實は急に商買用の事で、此處へ伺つた翌日横濱まで行つて來たものですから、えゝ爾うです、昨日歸つて來たのです。」

と云つて、自分の傍に置いた大形な新聞包を披き〳〵。

「何か伯父様や伯母様のお氣に召す物と思つたのですが……、何分目が舞ふほど忙しかつたものですからねこれは伯父様のお好きな淺草海苔です、これは東京の白牡丹で買つて來たのですが、伯母様のお氣に召すか何うか。」

と喜代子の前に差出したのは二寸四方ばかりの小箱であつた。

「爾うなら爾うと、一寸葉書でもお呉れだと心配は爲ないのに。」

と云ひながら、喜代子は眼を光らして土産物を見遣つた、

「お前來る度毎に怎麽ことしない方が可いよ、他人ぢやあるまいし。」

「いえ、これは別です、東京の土産ですもの、それから伯母様、これは春江ちやんに遣つて下さい、春江ちやんは居ないやうですね、遊びにでも出たのですか。」

「裏の方に居たやうです、今此處へ呼ますよ、おや〳〵マア立派な手遊品、怎麽に喜ぶでせう。」

と喜代子は大聲で臺所の方に向ひ、

「お釜や、その邊に春江は居ないかい、伯父様がおいでだから早くおいでと云つて、お呉れ」

と命じた。

それから自分への土産といふ小箱を取上げ、

「まあ立派な、お前怎麽もの貰つても可いのかい？。」

と驚異の眼を睜つた、そして其小箱の蓋を披くと中には煌乎と黄金の光が輝いた、

「好い指環だこと、本統に貰つても可いのかい、おほゝゝ。」

「好いですとも、伯母様のために態々買つて來たのですもの、それからと、與四郎は又一個の小箱を出した。

「これはアノ、何とか云ひましたね春江ちやんのお母さん、むゝ……鈴江さんに進げて下さい。」

鈴江にまで？。」

と喜代子は思はず叫んだが、今度は前程嬉しさうな顔はしなかつた。

伯母甥二人が恁麽問答をしてゐる中時輔は 顧 の白い鬚をしごき〳〵、苦い顔をして庭を見たり、欠伸をしたり。

庭では優しい聲で 鶯 が啼てゐた。

目に角

時輔が好物の淺草海苔よりも、春江が喜ぶ目新らしい玩具よりも、東京白牡丹製と稱する眞珠入の一環一個が甚麽に伯母の歡心を買つたか、それは問ふまでもなく曩日に增した此日の馳走振りでも與四郎には其れと頷かれた、しかし與四郎は未だ何となく物足らぬ思ひがした、それは他でもない、折角心を籠めた、自分の志し同じ白牡丹製の指環や、春江へ與へた玩弄品の數々を、肝心の鈴江がさして嬉しさ

うに爲なかつた事である。

例に依つてさん〳〵醉つた與四郎は其夜は北川家へ泊つた、翌日午過ぎに一度神戸へ歸ると云つて出て行つたが、中一日置いて又出て來た、而して今日は又前の日とは異つた洋服を着てゐた、來る度毎に斯うして服裝を變へて來るのが彼の小さな誇りであるらしかつた。

「最うお前、大抵用事は片付いたかい。」

と喜代子の訊ねるのを機會に、

「えゝお庇で何うか斯うか片付きました、是から當分此方の身體です、久し振りで悠々京見物でもせうと思つてます。」

と暗に此家に逗留の意をほのめかした。

「それなら神戸を引拂つて此方へ來てゐたらどうだい、其樣なホテルなんかに泊つてゐたら、第一費用もかゝるだらう、無駄ぢやないかい、其樣な事をしてるのは、

宅は田舍の事だし、ホテルに泊つてゐるやうな御馳走はないけれど、其換はりお金は要らないよ。」

「爾うですなア、ぢや當分御厄介になりますから、未だ彼方へ歸るまでは二三ケ月間がありますから。」

「二月が三月でも、お前さへ好ければ半年でも一年でも些とも構はないよ、善は急げだから早く神戸を引拂つておいでなさい。」

「それぢや爾ういふ事に願ませう。」

伯母甥は恁麽相談をしたが、與四郎は其翌日神戸の南洋ホテルを引拂つて來たといつて、大トランクと革鞄二個とを俥に積んで乘込んで來た。

喜代子は正月と祭儀が同時に來たやうに立騷いだ、それを見兼ねたのか主人の時輔は白い髭をしごきながら什麽にも不快さうな顏をして、

「可を其樣なに騷いでるのぢや、お前が與四郎を歡迎するのを別に惡いとは云はぬが、文雄や鈴江の手前少しは遠慮をしたら何うか……。」

と注意した。

「何ですッて、與四郎を歡迎するのが惡いんですつて、文雄や鈴江の手前遠慮せいと仰有るのですか。」

と息を喘ませた。

「いや爾う目に角を立てゝは困るぢやから、別に惡いとは云はぬと云つて居るぢやないか、惡くはないが、爾う大層らしく騷がぬが可いと云ふ事ぢや。」

「誰が何時大層らしく致しました、そりや與四郎は貴方には他人ですから何ですが妾には天にも地にも只一人の甥ですもの、それが久々で外國から歸つて來たのぢやありませんか、十年間もさん〳〵苦勞をした上に。」

と喜代子は涙ぐに成つた。

「それは分つてる、ぢやから、惡いとは云はぬが……。」

「惡くないものを、何故其樣な事を仰有るのです、妾達は何のために彼麼文雄や鈴江に遠慮しなけりやならないのです、妾は其譯が分かりません、其譯を聞かして下さい。」

と震ひ聲を出して所夫に食つてかゝつた。

「莫迦ッ、他の謂ふ言を誤解しては可けぬ。」

時輔も腹に据ゑ兼たが、此上彼是云ひつのると、事が大層になるので、彼は不自由な脚をエンヤラヤアと起上がつて、小用に行つた。

好い天氣だ

屋敷の背後を廻らした生垣の外は、南の展けた衣笠の野、青々として麥畑に春風が戯いで、眞黄な菜種の花がはら〳〵と散る、チ、チーと何處かで雲雀の鳴く聲が聞こえた。

晩春の空は紺碧に晴れて、空氣は寒くなく暑くなく、眞に人の肌に心地好いのであつたが、多病な文雄は朝から頭が重く惡寒がすると云つて、十時が鳴つても裏の離家から起きて來なかつた。

喜代子は臺所でお釜と二人で立働いてゐる鈴江に、

「鈴江さん、今朝は文雄の姿が見えないやうだが、また釣魚ですかい。」

と知つてゐながら態と訊ねた。

鈴江はハッと胸を躍らしたが、何氣ない顏をして、

「いえ、何だが氣分が惡いと仰有つて未だお臥つてゐるのです。」

「又かい、那の人の氣分の惡いのも久しいものさ、氣が好けりや釣魚だの散歩だのッて出歩く、爾うでなきや居間へすつこんで一日寢てゐる氣樂なものさねえ、それで其日々々が無事に送つて行けるのだから結構なことです。」

と喜代子は憎い口を利いて奥へ行つて了つた。

「母ちやん、母ちやん。」

門の中で遊んでゐた春江が、メリンス友禪の上へ白いエプロンを掛た可愛らしい服裝をしてチヨコ〳〵と走つて來て、突なり鈴江の裾へまつはつた。

「何ですねえ蒼蠅い、少し其處を退いてお呉れ、母樣は忙しいのだから。」

と云つたが、姑の姿が奥へ消えたのを見て、彼女は此間に所夫を起して來やうと思つた、絶えず斯うして姑と所夫の間に立つて氣苦勞をする心根の可憐らしさ。

「それでは春ちやんはお裏へ行つてお父樣を起して來て頂戴ね、母樣も一緒に行きますから。」

と春江の手を引いて離れ座敷へ急いだ。

「貴方何うです？、矢張り氣分が惡いのですか、少し好かつたらお起きなすつたら何うです。」

と其六疊の寢室を覗いて氣遣はしげに尋ねた。

龜の子のやうに夜着の中から頭ばかりを出して、其日の新聞を讀んでゐた文雄は、

「むゝ其樣なでもないが、何だかゾクゾクするやうでね。」

と枕元の煙草盆を引寄せて敷島に火を點けた。

「そりや良けませんねえ、しかし外は大層暖がですよ、起きられるなら起きた方が氣が晴れて良いでせう。」

と鈴江は言ひ惡さうに言つた。

「ね、爾うなさいな、其方が可いわ、ほゝゝほゝゝ。」

「父さん、おッき、おッきよウ。」

と春江は父の布團を引張つた。

「おい〳〵、お前までが何を爲るんだ、蒼蠅いねえ　またお母樣に何か言はれて來たのだらう。」

「爾うでも有りませんけれど……今日も亦　御機嫌が悪うござ いま すから……。」

「困るねえ、あゝ〳〵小糠三合だ、詮方がない勇氣を出して起きるとせう。」

「それが可うござんすよ、春ちやん其處をお退き、父様がお起きになるんだから。」

と鈴江は所夫の身を起したのを見てホッと胸を撫つた。

「あゝ好い天氣だ」

庭の方から高い聲が聞こえたと思ふと、最早其人は椽先へ來てゐた。

「文雄君、何うしたです、未だ寢てるんですか　恁麼天氣の好い日に何時迄も寢てると身體が腐りますせ」

と音高く椽に腰を掛けたのは與四郎であつた。

我物顔

「何だか身體の具合が惡いので、つい朝寢坊をしてゐたのです。」

文雄は帶をしめ〳〵椽先へ出た。

「はゝゝ、相變らず弱味噌だね、僕なんどは今朝五時から起きて、朝飯前に天神様から金閣寺の方を一廻りして來たんです、豪いでせう、はゝはゝ」

と嘲けるやうな笑ひ方をして敷島の煙りを高く吹いた。

「爾うです。」

と文雄は苦笑したが、

「此方へ上がつたら何うです、四疊半の方は片付いてますから。」

とそれでも何處かに氣兼をして愛想を云ふた。

「では失敬して暫時話て行くかな」

「さあ何うぞ。」

與四郎は無遠慮に文雄の居間に入り込んで、鈴江が今火を入れた火鉢の前へ大胡坐を掻いた。

外國歸りと云ふのを外見に、彼れは一寸の散歩にも直ぐ洋服を着る癖があつて、今も華美な縞の背廣に赤いネクタイをしてゐた。

「私は一寸顏を洗つて來ますから。」

と文雄が出て行つた間に、彼はブカブカ烟を吹きながら、

「しかし弱いですねえ、文雄君は、那麼身體が弱くちや可かん。」

と六疊の方を片付けてゐる鈴江を見返つた。

「けれども貴方は感心ですねえ、朝は早くから起きて働き、又夜は深更まで機織をして能く其れで身體が續きますねえ實に感服だ、僕が此家へ來てから最う一ケ月にもなるが只の一日だつて貴方が身を樂に持つてゐた日は見た事がない、流石口喧ま

しやの伯母も、貴女にばかりは心から感心してゐますからねえ。」

と可厭な笑顏をして鈴江の顏を凝乎と見上げた。

鈴江は此の人の恁麼世辭を聞きたくなかつた神戸のホテルを引拂つて來たといつて此家へ來てから與四郎が此家を什麼にも我有顏に大きくなり暇さへあれば南洋だマニラだと駄法螺を吹き立て來てから一週間程の間は毎日奥の座敷で主人時輔と膳を向ひ合ひて晩酌をするのであつたが跡引上戸の與四郎は二時間も三時間も膳から離れぬので、後には時輔が其れを蒼蠅がつて喜代子に何か注意したと見えて、それから以後は晩酌は固より三度共茶の間の方で一同と一緒に爲る事に成つたが、爾うなると彼は伯父といふ煙い人が前に居ぬので、愈羽を伸ばして主人顏をして酒を飲んだ、唯飲むだけなら可いが何時までも何時までも飲みながら他人には面白くもない自分の自慢談ばかりをした、そしてちよい〳〵嫌味な眼をして鈴江を見たり他聞の惡い笑談などを云つたりした、それを喜代子が咎めやうともせぬを好い事にし

て彼は益々大きくなり、春江やお釜や爺やは口巾ッたく呼捨にするのであつた。

爾うした事の一々が鈴江には心から氣に入らなかつた、一つは朴平爺やが言葉が先入主を成したのでもあらうが與四郎の總ての言語や擧動が一々鈴江の胸を刺激するのであつた、けれども元來素直で優しい心を持つた鈴江は、爾うした心の底を色には少しも見せなかた、そして何時も愛想好く當らず、觸らずに待遇てゐた。

「ほゝゝゝ其樣な事はございませんわ。」

と鈴江は成るべく與四郎の方を見ぬやうにしながら、好い加減に挨拶したが、

「サ春江ちやん彼方へ行きませう、また伯父さんに面白いお噺しをしてお貰ひなさい。」

と春江を手を曳いて離座敷を出やうとした。

與四郎は什麼にも殘念さうに、

「春江此處へおいで、伯父さんが面白いお噺しをしてやらう。」

と小手招きをしたけれど、春江は首を揮つて否々をした。

忠告

鈴江が彼方へ去つて了うと、與四郎は鳶に油揚を攫はれた犬のやうな顏をして、肩を搖つたり膝を動かしたり、底光のする可厭な眼で四邊をジロジロ見廻したりしてゐたが、

「やア失禮しました。」

と文雄がタオルを片手に入つて來ると、彼は鈴江への鬱憤を直文雄の頭上へ降らした。

「隨分悠然だッたね、君は顏を洗ふにまで其樣なに手間が取れるのか。」

「爾うでもありませんが、其樣なに手間取りましたかい。」

と文雄は笑ひながら座つた。

「取れたとも、苟くも男子は何事に依らず其樣なに愚圖々々してゐちや可けない、君、今日の世は活きてゐる世界だよ、時は是金也、一時一分も、敏法にやらないぢや到底この生存競爭場裏に立つて優者と成る事は出來ない、何時も敗者の地に居て泣いてゐなきやならない。」

肺に異狀があるので、さらぬも神經過敏に成つてゐる文雄は、與四郎の此の一言がグッと癪に觸つた、見る見る中に額に青い筋を立てたが、それでも凝乎と堪へて强て笑顏を見せた、

「はゝゝ大層むづかしいのですね。」

「難かしいとも、僕が若し君のやうに優柔不斷であつたなら、與四郎は依然元の與四郎で道樂者だの放蕩者だのッて、親類共に罵倒され了るのだが、お庭で僕は機敏な點に於て大に君に優つてゐるから、南洋の競爭場裏でマア何うか斯うか成効に庶幾い地位を占める事が出來たのだよ、はゝゝはゝゝ。」

「什麼も爾うですなア。」

「だから僕は君に忠告せうと思ふのだ、君僕の忠告を聞くかね？」

「聞きます、何でも云つて下さい。」

「はゝはゝ、何でも云つッて、云つたら後で憤るんだらう。」

「眞逆……。」

と文雄は心の怒りを堪へるべく、無性に煙草を喫んだそして咳いた、咳いて咳いて赤い顏をした。

「憤らなきや云ふがね、君は實際いけないよ、僕の見た點では。」

「何麼がです？。」

「甚麼がッて、平素の行ひがさ、爾ういへば君は病氣だからと云ふだらうが、人は疾病の器だ、誰だつて少し位は頭が痛んだり胸が痛んだりするさ、それに君は其都度に神經を惱ましてヘコタレて了うのだえ、違ふかね　君、だから伯父だから伯母

だつて君を濟度すべからざる怠惰者と見てるのだ、夫ぢや可けないよ君」

「……。」

「少し僕のやうに元氣を出し給へ、そして大に活動し給へ、其樣なに毎日ぶらりしやらりと遊んでゐないで何處か勤め先を見付けて出掛けちや何うだね、探せば何處かあるだらう君を使つて呉れる先が、無いかね。」

文雄は是れだけ聞くのが實に苦痛だつた、自分は何故此人から恁麽失禮な言葉を聞かねばならぬのかと思つた、眼の底には涙が浸んで來た、兩の手先がブル〳〵震へた。

「無い事はないです、有ります。」

「有るなら何故行かないんだ、徒に親の脛をかぢつてるのが能ぢやあるまい、いや失禮々々〳〵、過言は恕すべし、はゝゝは、ゝゝ」

與四郎は其處の急須から自分で茶を注いで喫み〳〵、

「しかし惡く取つちや可かんよ、僕は君の爲、此家の爲、大に君に奮勵して貰はうと思つて云ふのだから、お互ひに斯うして居りや他人ぢやないからねえ。」

文雄は黙つて熟乎と考へてゐた。

蘇鐵と水仙

がッしりと肉付いた双の肩を盛上げ勝利者のやうに傲然と大胡坐を掻いて上目づかひをしてゐる與四郎と、痩た身體を詫しげに、頰骨の稍尖つた蒼白ひ顏に、口惜しさ心外さの色を包んでじッと頭を垂れてゐる文雄との對照は、花の色も褪せ葉も萎れた水仙鉢に隣つて、幹にも葉にも蕃氣の滿ちた蘇鐵の盆栽を列べたやうだッた。

二人の間に深ひ沈黙は物の五分間も續ひて、双方から吹出ず煙草の煙が濛々として渦を卷いた。

やがて與四郎は大きな欠伸を一つして、

「好い天氣だな、今日は久し振で一寸神戸へ行つて來るかな。」

と獨り語を云つたが、それでも默つてゐる文雄を白い眼で見下して、

「まあ能く考へて置き給へ、僕の云つた事が惡いか、君の考へが間違つてるか、僕は事實好意で云つてるんだからね、君が賴むとさへ云へば、斯う見えたッて相應に交際のある僕だから、君のために周旋の勞を執るよ、全く。」

「難有う、其好意は謝します、しかし私にも考へが多少あるですから、今に其れを現實にして御覽に入れます。」

文雄は屹と顏を上げて斯う云つた、そして此の間嵯峨で遇つた舊友山崎の事を思ひ出した、山崎は何時でも大阪へ來いと云つて呉れた、山崎の會社は山崎の叔父が社長で山崎が支配人だ、自分一人位を入社させるには山崎の心一つで何うにでも成ると云つた、山崎を賴まう、山崎に賴んで那の會社へ入り、面と向つて恁麼無禮を

云ふ此の男や、年中自分を懶墮者だと口癖のやうにいふ養母を驚かして、遺らう、

「今に見てゐるが可ひ、今に見ろ。」

と彼は心の底で叫んだ。

「いや頓だお邪魔をしました、はゝゝ僕も少し過ごしたかも知れないが、惡意はないんだから、まあ恕して呉れ給へ、はゝはゝ。」

と與四郎は恁麼捨辜詞を殘して、椽の方から庭づたひに彼方へ去つて了つた。

文雄はその與四郎が踏んで行つた庭の飛石を凝乎と睨んで、前齒で下唇を強く嚙んでゐたが、その凝視めた兩の眼からは何時かホロ〳〵と露がたばしつた。

「失敬な、實に失敬な男だ、好意なら好意のやうに云ふ辭は何程もある那麼が何の好意なものか……。」

口惜しさに我知らず呟いたが、それにつけても文雄は自分とかふものを考へずには居られなかつた。

「あゝ自分、自分は何うして恁麼に不幸に生れ付いのだらう、ゑゝ此の身體がこの身體が壯健だッたら！。」

と思はず兩手で胸を掻拐つて身を躁いた、そして机の上へ顏を俯伏して男泣に泣いた。

「貴方、口惜しかつたでせうねえ」

次の間から泣聲で斯う云つて、轉ぶやうに驅け込みさま、犇と文雄の膝に縋つたのは鈴江であつた。

「おう鈴江か、お前今のを聞いてゐたのか。」

「えゝ聽いてゐましたとも、何も彼も悉な聽きました。」

と鈴江はおろおろ泣きながら所夫を振仰いだ、

「貴方おは立つでせうけれど、堪へて下さいね、忍耐して下さいね、短氣を起さないでね……。」

「むゝ俺はザゞ殘念だ。」

「貴方！。」

「鈴江！。」

夫婦は手と手を取合ふて涙に暮れた。

裏庭

與四郎は文雄の居間を出ると、喧嘩犬が敵に勝つた時のやうな誇らしい顏をして其離れ座敷の後方に當つた裏庭へ出た、其處は十坪許りの菜園に成つてゐて、葱だのほうれん草だの蕪だの、季節の野菜が植られてゐた、そして其先は杉垣に成つてゐる垣の外には青い麥畑が見えた。

「お婆ちやんコレなあに？」

「これかい、これはね、ほうれん草といふものだよ。」

「ほうれん草ッてなあに？。」

「おほゝゝ、ほうれん草はほうれん草だよ、春江ちやんには分からないかい。」

「お婆ちやん、それなに？、それ食ゆの？。」

「あゝ食るのだよ、お婆ちやんがコレを恁うして取つてね、春江ちやんにんにして進げませうねえ」

傍にまつはる春江は恁麼ことを云ひながら、喜代子は畑のほうれん草を抜いて大形な笊の中へ入れてゐた、五月の太陽がこの菜園一杯を照して折々麥畑を渡つて來る風につれて、垣根に咲いた山吹の花がはら〳〵と散つた。

與四郎は鄭島の煙りをーげながら、ニヤ〳〵笑つて喜代子の方へ近寄つた、ト見ると喜代子はほうれん草を抜く手を休めてニッと突つた、

「何うだつたい、云つてお遣りかい？。」

と上目づかひをして與四郎を見た、

「はゝウンと云つて遣りましたよ。」

「少しは反響へたやうかい？

「こたへたでせう、思ひ切つて爾う云つて遣つたんだから那麼で性根に入らなきや無神經ですよ、はゝゝはゝゝ。」

と與四郎は敷島の吸殼を遠くへ捨てた。

「おほゝ、そりや好い氣味だつたねえ。」

と喜代子は腰を伸すやうにして立上り、

「なんぼ何だッて那麼ぢや始末にをへないからね。」

と思ふ存分顏を顰め、

「何程身體が弱ひからッてお前、毎日々々ぶらりしやらりとしてゐて、朝寢はする宵ッぱりはする、養生だの何だのと云つて、暇さへあれば遊び廻つてゐる、本統にお話しにも何も成つたもんぢやないからねえ。」

「爾うですとも、天から成つてゐないからね、はゝゝはゝゝ。」
「全くだよお前、それで何かへ、お前に何か云はれて甚麽ッて云つたい？。」
「自分にも考へがあるから、今に何處かへ勤めるッて云つてましたよ、はゝゝ。」
「何時でも那麽ことを云つてるんだよ、口ばかり一人前で、働きッたら普通の人間の十分一も出來ない癖をして。」
と喜代子は左も憎さげに離座敷の方を睨んだ、
「しかし今日は大分藥が利いたやうだから、今に何とかなるでせう。」
「何とか成らないで何うするもんかね。」
と喜代子は聲を潜めて、
「病氣で人間並の事が能ないなら能ないで、別に此方は強て那の人に働いて貰はなくつても可いから、自分の方から身を退けば可いのに、何程當こすられたり嫌味をいはれたりしても、一向無神經で何時までも那麽してるんだからね、妾はもうゝゝ

愛想もこそも盡き果て了つてね。」
「いや大丈夫です伯母さん、僕が斯うしてる以上は今に……。」
と與四郎は何心なく垣の外を見た、丁度其時、一人の男が麥畑の中から身を屈めるやうにして、凝乎と此方の容子を窺つてゐるのを認めた。
そして其男の顔を能く見た時、與四郎は、
「あッ！。」
と思はず小聲ながらに叫んだ。

其後釜に

「え、何だい？」
喜代子は與四郎の聲に驚いて思はず後方に振向いた、そして垣の外に怪しい男の居るのに氣が付くと、何となく顔を曇らした。

「鳥渡尋ねますがね、あのウ等持院といふ御寺は何處でせう？。」

垣の外の男は斯う云つて、乎と與四郎の方を瞰た　この暖氣に古ぼけた外套を着て、霜降の鳥打帽を被つた眼のギョロリとした迂散臭い若者であつた。

「等持院なら此の表通りへ出た處だ其處から眞直に行けば直ぐ門が見えます。」

と與四郎は應へて、

「どれ僕も是から少し散歩して來やう、伯母さん、宅の前を眞直に東へ行けば紙屋川の橋の處へ出ますねえあの藤棚の茶店のある？」

と誰かに聞けよがしに高い聲で訊ねた。

「何だよお前さんは、其樣な分かり切つた事を訊ねて、おほゝ旅の人が何かのやうに、何うかしてる此の人は。」

と喜代子は下に置いたほうれん草の笊を取上げた、

「はゝゝゝ久しく外國へ行つてゐた故か、何だか此邊の地理を忘れたやうな氣がするんです、そして何ですねえ、那の橋の袂を上流へ上ると天神樣の裏の梅林の所へ出るんですねえ、那の谷間になつてる景色の好い處？」

「爾うだよ、何を云つてるんですねえ、らしさうに……。」

「僕は以前から彼處が好なんです、散歩をするのには閑靜で好い所ですどれ久し振りで彼處の景色でも見て來るかな。」

と與四郎は麥畑の中の男の方を屹と見た、其時件の男は、

「何うも難有うございました、此道を行けば可いのですね？。」

と二度計り低頭をして立去つた。

「ぢや伯母さん、僕は鳥渡出て來ます。」

と與四郎が行かうとするのを、喜代子は慌てゝ呼止めて、

「それからねえ與四さん、今も云つたやうな譯だから、お前何とか爲てお呉れでないか彼奴を。」

「え何です、何とか爲ろと仰有るのは、彼奴を此處の家から放逐する事ですか。」

「大きな聲をおしでない。」

と喜代子は手を掉つたが、惡癖の囁くやうな聲をして

「妾は全く癪に觸つて癪に觸つて堪まらないんだから、一刻も早く追出して了ひたいんだけれど、當人が那の通りの上に、伯父さんが最う一息齒切れをなさらないので……、お前といふ人も斯うして歸つておいでだつたのだから、最う那麽人間に用はないんだからね。

と喜代子は氣味の惡い眼光をして與四郎を視た。

言ふまでもない其眼は彼を追出してお前を其跡釜に、この北川家の養子に直さう妾の心……、といふ意を語つた、それと覺つた與四郎は、固より此方の思ふ壺であると心裡に頷いて莞爾含笑んだ。

「心得てゐます、ちやんと此胸にあります、伯母さん、心配する事はないです、今

に御覽なさい、僕の手腕をお目にかけますから、はゝゝ、爾うなくてさへ、今日は餘程奴の神經を刺戟した鹽梅ですから、今に何うにか成ります。」

「一日も早く那の厄病神を退治して了はないでは、妾は〳〵。」

と喜代子は顰められる丈顔を顰めて見せた。

「よろしい、萬事僕に任してお置きなさい。」

と與四郎は得意氣に胸を反らして見せた。

先刻から其邊の草を摘んだりしてゐた春江は、軈て其れにも飽いて喜代子の袂に縋つた。

「お婆ちやん、お婆ちやんよウ！」

「何ですねえ蒼蠅い、其樣なに引張つちや嫌です。」

と荒々しく袖を拂つた。

慈悲の心

喜代子が裏庭から母家へ歸つた時、珍しく奥の時輔の居間で話し聲が聞こえた、

「おや、誰かお客があるのかしら」

と喜代子は密と座敷の方から主人の居間に近づいて聽き耳を立てると中の聲は思ひ懸けもない文雄であつた

「まあ、何時の間に？、甚麼話をしてるんだらう、何か與四郎の事でも告口してるんぢやなからうか。」

と直持つて生れた彼女の邪推か伴つで扱足差足、隔ての襖際へ近寄つて耳を澄ましたゝ

時輔は五月の日光のぽか〳〵と暖かい椽端近くへ褥を敷いて、前には煙草盆に新聞、茶道具などを列べて、雪顎髭をしごき〳〵、文雄の言ふ處を聽いてゐた

文雄は非常に興奮してるらしく、蒼白い顏に少しく紅を潮して、血の糸のひいた眼で養父時輔の顏を凝乎と視入りながら、相手の返答什麼にと息を喘ませてゐた、

密と唐紙の隙間から覗いた其場の光景が普通でないので、扱てはと喜代子は胸を躍らした。

「うむ、なる程それでは、何ぢやな何時までも斯うしてぶら〳〵してゐては詰まらんから、一つ大阪へ行つて其山崎といふ友人の勤めてゐる會社へ使つて貰はうといふのぢやな。」

と時輔は、注意深い眼を光らしてジロリと文雄を視た、

「さ、左樣です。」

「ふむ、それで何かの、お前が何時でも行けば先では直ぐ使つて呉るといふのぢやな。」

重ねて問はれて文雄は一寸躊躇つたがそれでも、與四郎に愚弄しられて飽まで逆

上してゐる彼は深い前後の思案をするまでもなく、

「はい、それは最う何時でも、來れば好いつて云つて居りましたから……、他ならぬ中學時代の人ですから、血を分けた兄弟も同じことです……ですから、今も申上げたやうに何程身體に故障があるからと云つて、毎日々々斯う遊んで居りましては何ですから、私は一つ其方を頼んで何しやうと思ひ立つたのです、唯大阪といふ丈がその何ですから。」

「いや、それは何處でも可い、大阪ぢやらうが東京ぢやらうが、程好い奉職先があれば、何事も其身のため家のためぢやから、私に異論は少しもない、しかし近頃身體の加減は何うぢやな、日々の勤務に堪へる事が能るかの？

流石に男は男だけで、喜代子と違つて時輔には慈悲の心があつた、文雄は爾うした優しい養父の言葉に思はず眼を瞬たいて、

「え、それは大丈夫です、長らく斯うして遊んでゐましたのでお影で此頃は非常に

元氣が出ました、はい。」

と聲に力を入れて、

「それでは私が大阪へ行きます事をお許し下さるでせうか？。」

「むゝ、そりや許すも許さぬもないお前が其れ丈の奮發心を起したのは俺も嬉しく思ふのぢや。」

と時輔は煙管を取上げて一ぷく吸付け、

「それで何か、鈴江や春江は何うするのぢや、一緒に大阪へ伴れて行かうといふのか、それとも……？。」

「えゝ、それは何です、何れとも指圖通りに致しますが、先方へ行つて私の地位の確乎となりますまでは……。」

「宅に置いて行かうといふのぢやな？。」

「左樣です、それに宅にも種々御用もありませうから。」

「むゝ、分つた、それは、其方が可い、伴れて行かぬが可い。」

と時輔は何をか獨りで頷いて髯を握つた。

唐紙の外では、喜代子が首をすぼめてニッと笑つた。

念の上に念

白い顎の髯を握つて凝乎と庭の方を見た時輔の眼には、何となく不安なやうな光が見えた、時輔は何時も自分の過去現在未來を考へる毎に、言ふに言はれぬ不安な思ひに襲はれるのが常であつた、爾うした思ひの中には、自分の今の境遇、未だ老耄といふ年齢でもないのに、痼疾のために身體の自由が利かず、其日々を爲すこともなく送つて行くといふ事が齒痒ひのも一つであらう、其を精神上に醫すべく、詩や和歌や著述物に耽るといふほどの彼には學問はなかつた、又一つには京都府事務官であつた當時を追憶して今の寂寥たる生活が物足らぬのでもあらう、しかし其

よりも、常に彼の心を懊惱せしめるのは、此年齢になつて實子といふものがない事と、自分の周圍に自分の血を分けた親戚といふものゝない事とであつた。

折角これならばと思つて貰つた養子の文雄が、蒲柳の質といふばかりでなく、何うやら肺に異狀のあるらしい上に、男らしい氣魂がなくて愚圖々々してゐることや妻の喜代子が只もう自分一人の天下のやうに尾をのし羽をひろげ、家の内一杯になつて采配を揮るのみか、近頃は又その甥の與四郎といふ放蕩者を引入れ、一にも與四郎二にも與四郎と、彼に深酔してゐるなどが、時輔には不滿で、不滿で堪まらなかつた。

何程多病でも男子の氣魄に乏しくとも、放蕩無頼であつた與四郎に較べては、時輔は文雄の方が遙に頼むに足るものだと思つた、その文雄が、何と思つたのか今日は突然、氣でも狂つたやうに自分の前へ來て、急に大阪の會社へ勤めたいと云ふ其容子が、什麼も平素の文雄と異つてゐるので、先刻與四郎にさん〳〵愚弄しられた

爲文雄が神經を興奮させたとまでは知らぬ時輔は、是には何か仔細があらう、何れは又何か喜代子が與四郎に言はれたゝめ、遽に斯うした決心いや奮發をするに至つたのであらうと、推測はしたが、文雄の言ふやうに、大阪へ行つて直ぐ然うした木に餅の生るやうな勤務口が有るか何うかといふ一事が、世事に經驗の深い時輔には不安の種であつた、そして文雄の言ふ處を一から十まで信用する事は出來なかつた。

何時までも庭を眺めてゐる時輔、兩手を膝に、凝乎と下を向いてゐる文雄、二人は思ひ〳〵に稍や暫時沈默に陷つてゐたが、

「それではお父樣、私大阪へ行つても宜しいでせうか？。」

文雄は養父の顏色の憂つたのを見て何か自分の言葉の中に氣嫌を損じたのではなからうかと思つて。恐る恐る時輔の顏を横から覗くやうにして訊ねた、

「うむ善いも惡いもない、今も云ふ通り俺に異論はないが……先方が何うだらうかと思ふでのう、果してお前の思ふ通りなら可えが、物には念の上にも念を押して置かぬと後から悔る事が出來るからのう。」

「しかし、それは大丈夫です。」

「大丈夫だらうが、今一度手紙を其の友人に出して、能く照會をして見るが可え、そして先方から確答を得た上で行くが可え、行く事に就て俺に不服は少しもない、勿論お母さんも賛成ぢやらう。」

襖の外の喜代子は、最う此の邊で自分が出ても可い幕だらうと思つて、颯と襖を開けて身を現はした。

「おや文雄さん、此處へ來ておいでだつたの、未だ朝の御飯もあがりでないから、先刻から探してゐた處だつたよ。」

といつて所夫時輔の傍に坐つた、そして冷笑を含んだ眼で文雄を視た。

心の裏

文雄は其眼を見ると非常に不快を感じて我知らず顔を背向けたが、假にも親と名のつく人に言葉を掛けられて返答をせぬといふ譯にもゆかぬので、

「えゝ少しお父様に御相談がありましたので……、御飯なら今彼方へ行つて戴きます。」

と不性無性に返答をした。

「爾う、お父様に御相談？、御相談ッて甚麽相談ですの？、妾にや聞かしちや惡いんですか。」

と喜代子は皮肉に搦んで來た、心の裡では、此處で今一度此の男を憤らせ、身體中の血といふ血を殘らず頭腦へ逆上らせ我から狂ふて此の家を出て行くやうに爲て遣らうと思ひつゝ、

「いえ其樣な事はありません。」

と文雄は切なさうに言つて時輔を見上げた、

時輔は頻りに顎の髯をしごいてゐたが、其時初めて文雄の言葉を引取つて、

「なあに、何でもないのぢや、文雄が奮發心を起して大阪へ出掛けやうといふのぢや。」

とグイと手先に力を入れて髯を引いた、願の髯を握つてしごいたり引張つたりする時は、屹と彼の心に何かしら不快を懷く時であつた。

長らく連添ふ喜代子として、爾うした所夫の癖を知らぬのではなかつたが、文雄といふ者を憎むの念は頻りに、所夫の不氣嫌なのを顧みてる暇はなかつた。

「へえ、大阪へ？、大阪へ何を爲に行かうッて仰有るの、文さんは？」

と喜代子は態とらしく眼を睜つた。

「大阪に舊友が持つてゐる會社があるといふので、其方へ就職しやうといふのぢ

や。」

と時輔は先刻文雄から聞いた通り、文雄が嵯峨で測らず舊友山崎に遇つた事から、山崎の叔父が社長である建物會社へ入社の豫約をした事を話して、

爾ういふ譯で、今度一奮發して其の會社へ出やうといふ相談なのぢやが……。」

「へえッ、爾うでしたか、それは妾にも初耳でした、文さん今まで其樣な談は微塵もした事はないんですからねえ、それや妾のやうな無學文盲の女風情に相談なんかしても詰まらないでせうけれど。」

「そ、其樣な譯ぢやありません、此の間から折を見て御相談せうと思つてはゐたのですけれど……。」

と文雄は眞赤な顏をして辨解した。

喜代子は嘲笑ふやうな笑を片頰に。

「ま、ま、其樣な事は何うでも可ござんす、何うせ妾なんぞは何ですから、おほゝ

別にお前さんから下相談を受たいとも思ひませんがね、しかし其れは何よりですねえ、其樣な好い口があるなら、善は急げですから一日も早く其方へ賴み込んだら可いでせう、妾は又其樣な事とは知らないもんですから、何うかお前さんの出世の出來るやうにと、實は此間からも內々で與四郎と相談してゐた所なのでした。」

と喜代子は所夫と文雄を交る〳〵に視て、

「すると與四郎の云ふのには、私の經營してる新嘉坡の雜貨會社の方で上席の書記が一人缺員なので、今その人物を搜してる處ですが、文雄さんなら至極適任だらうと思ふのですが、文雄さんさへ南洋まで出懸ける奮發心がお有りだつたら、會社の方は何時でも好いんですがと、恁麼ことを云つてましたが、文さんの方に其樣た可い口がお有りなら、何も態々南洋まで出掛けなくつても、つい目と鼻の先の大阪だといふのだから何よりぢやありませんかねえ、貴方しかし眞實の事でせうね、眞逆文さんが出鱈目をお云ひの筈もないから、おほゝ何は兎もあれそりや文さん早く

其方をお極めが可いでせう、人間は何よりも遊んでゐるといふ事が一番不可ないんですからねえ。

言葉の中には針もあれば毒もあるが詰まるところは文雄の意見に賛成したのだ。

「うむ爾うぢや。」

と時輔は又髭をしごいた。

斯うして一も二もなく賛成する喜代子の心の裏には甚麼がゐるか、それは文雄には能く釋めてゐた。

小仙郷

北野天滿宮の裏、紙屋川の上流梅咲く頃は兩岸の清香馥郁として、幾十本の梢かちひら〳〵と散る花が、水晶を鎔したやうな谿水に揉まれ漂よふ風情は繪にも及ばぬ程で、北野へ參詣の老若は必と此處の景色と花に憧れ來るので、花の下には茶店

も出ればビール正宗の旗も飜り、可なりの雜踏を見るのであるが、今はその梢も殘らず青葉若葉になつて、さら〳〵と流るゝ水の音、葉がくれに鳴く小鳥の聲、この小仙郷は眞に物靜かであつた。

「大將、おい大將、此處ですよ、此處に居るんですよ。」

華美な背廣の洋服に鼠の中折帽、細いステッキを振り〳〵、衣笠村の方から來て此の谿間へ降り、細い丸木橋を渡つて四邊をキョロ〳〵と見廻した與四郎の耳に、何處からともなく濁つた聲が聞こえた。

與四郎はハッと立停つた時、

「へ、、へ、、、、此處に居るのが分かりませんか、君のお言葉通り此處へ來て、先刻から久しいことお待ち申て居たんですよ。」

とつい目の先に見える茶見世の四柱亭から、ぬッと姿を顯したのは、先刻裏の麥畑から屋敷の中を覗き込んだ古外套の若者であつた。

「おう其處に居たのか、それでも俺の謎を解いて此處へ來て待つてゐたのは感心だ。」

と笑ひながら與四郎は四柱亭の中へ入つた。

若者は自分の前へ正宗の二合瓶を二本計り立てゝ肴も何もなしにチビチビ飲んでゐたのであつたが。

「大將一獻何うです。」

と猪口を出した。

與四郎は敷島の吸殻を投出し、同じ床几に腰を掛けて、

「むゝ貰はう、しかし感心だなア、梅の頃なら何だが、最早恁麼に青葉になつてるのに、此處で正宗なんか飲めるといふのは意外だッた、肴はないのか。」

「肴ですかい、そりや有るには有りますあ、お好みなら申付けますがね煮抜き玉子か燒きするめの硬い奴、外に京名物のカキ餅もありますが豆ねぢでも飴ン棒でもね

へゝゝ。」

「其樣な物が食へるか、はゝゝ道理で肴がないと思つた。」

「けれども澁い番茶で面を顰めるより此方が好ござんせう。」

「そりや爾うだ。」

と與四郎は猪口を若者に返して、

「ところで君、俺が那の家に居るといふ事が何うして君に分かつた、多分俺の居るてえ事を知つて態々やつて來たんだらうが……？。」

「勿論でげす、へゝゝ、其處は小蛇の道は大蛇でね、斯う見えたつて業平小僧の三吉てえ異名をとつた哥兄樣です、へい何程お前さんが自分の居所を隱してゐたつてチャンと分かりまさあ、へゝゝ。」

と三吉は凄い眼光をして笑つた。

「爾うか、流石は三吉だ、褒めて遣はさう、はゝはゝ、しかし君困るぜ恁麼温氣に

なつてるのに、其樣な外套なんかを着込んでさ、一寸見た丈でも迂散臭いぢやないか、其樣な服裝をして構はず訪ねて來られちや、何も斯も打ち壞しだからねえ、だから此處へ來て待つてるつてえ謎を掛たんだがね、俺に用といふのは全體何だい、まあ其から聞かう。」

青葉の梅林には折柄人の影も見えないので、與四郎の聲は高かつた。

「用ですかい？、用といふのあ、へゝゝゝお極まりでさあ。」

「何だ、否な笑ひ方をするない。」

秘　密

更に正宗の二合瓶二三本を呼んで二人は額と額を擦合ふやうにして暫時話してゐたが、軈て與四郎は内ポッケットから黑皮の紙入を出して、其中から青い紙幣を一枚引出した。

「まあ爾う云つたやうな次第で、今の俺は南洋成功者の紳士に成り澄ましてるんだからね言はゝ大事な處なんだだから、其樣な怪しい風采をしてノコ〳〵面を出されたは日にや、折角の魂膽が滅茶々々に成つて了うからね。」

「そりや御尤もでげす、へゝゝゝ。」

「まあ今日は兎に角是だけで忍耐して呉れ、愈俺が伯母や伯父の信用を得て那の家の養子に直るといふ事になりや、百や二百は何時でも都合するよ、折惡く今日は持合せがないから少いが是丈でね。」

と與四郎が出した紙幣を業平小僧の三吉は手には取つたが、不足な顏をして、

「大將、こりやお前さん十圓ぢやありませんか。」

「むゝ十圓だ、十圓ぢや不足か。」

「不足にも何もそりや、お前さん約束が違ひまさあ、汽船から上陸つて神戸の米利堅波止場で別れる時何て云ひました、俺が京都へさへ行きや何時でも二百や三百の

金は融通がつくから、今日の處はコレで辛抱して那の一件は秘密にして置て呉れろ
俺も男子だ、嘘は吐かないと云つたでせう。」
と三吉の眼はギョロリと光つた。
「むゝ、そりや爾う云つたがそれだから今も事情を話したぢやないか。」
「そりや分かつてまさあ、分かつてるにや分かつてるが、そいつはお前さんの方に
ばかり都合の好い話して私の方にや些とも都合が好くねえんで、へゝゝ、爾うでげ
せう、大將、まあ、能く物を考へて御覽なさい、私が一口出る所へ出て、お前さん
が新嘉坡で甚麽事をして來たかといふ事を喋りや、へゝへゝ、大將、お前さんの手
は直ぐ後へ廻りますぜ。」
「其の時は君も同時に喰び込むんだ！」
ど與四郎は少し神經的な聲をした。
「そりや覺悟の前でさア、だから惡い事は申しません、へい、恁麽風采をしてるも

近頃は全然目が出ないんで、詮方なしでさア、義兄の方も此頃は不景氣續きですか
らお前さんにお縋り申すより他に詮方がないんで、へい全くですから、澤山とは云
ひません、最う一二枚、紙入の中にや未だ四五枚あつたやうですからね、へゝゝへ
ゝゝ。」
相手の弱點を押へてゐる三吉は容易に捏まなかつた。
「困るねえ、其樣な無理を云つちや。」
と與四郎は苦い顏をしたが、又ポッケットから紙入を出して澁々ながら同じ紙幣を
二枚拔き出して三吉に渡した。
三吉は手早く其れを懷中に納ひ込んで、底光のする兩眼に笑を浮め、
「ぢやア今日の處は是丈で悉耐するとしませう、へゝゝ、全く大將、私アお前さん
に恁麽無理は云ひ度くないんですが、實アお前さんが神戸での約束を反古にして、
自分の居所さへ知らして呉んないんでせう、誰だつて業が煮へまさあね。」

「そりや爾うだらうが、俺も種々忙しかつたからね、つい君の事を忘れてゐたんだが……。」

と與四郎は苦笑したが、急に四邊を見廻して小聲になり、

「ところで三公、別に君に頼みたい事があるんだが、一骨折つて呉れるかね？。」

「えゝ私に出來る事なら何でも。」

と三吉はニヤリと笑つて、

「何ういふ一件です、眞逆新嘉坡の二の舞ぢやありますまい。」

「知れた事だ、那麽ことは俺には最う二度とはしない。」

と與四郎は否な顏をした。

折しも天滿宮の境内の方から、この梅の谿へと降て來たのは、何處かへ買物にでも行つたのか、一古びた手拭で頰被りをして風呂敷包を肩に掛けた、農夫姿の朴平であつた。

板橋を渡つて

朴平親爺は細い急な坂を谷へ降りやうとしたが、偶と坂の下の四柱亭の中を見て、

「や、彼處に居るのは與四郎だッペ、畜生今時分にハア恁麽所へ來て甚麽をしてゐるだ？、相手の奴曾ぞ見た事ない野郎だが、何れ同じ穴の狐野郎だつぺ、畜生何か相談ぶつてゐるやうだが、むゝ。」

と心裡で思ひながら其儘棒立に立つた儘少時四柱亭の中を瞬きもせず見下してゐたが、此方の與四郎は爾うした人物が自分等を見てゐるとは少しも氣付かず、頻りに業平小僧の三吉に何事か話してゐた。

他聞を憚るためか、與四郎の聲は極めて小聲であつたので、坂の上の朴平親爺には聞えなかつた、親爺は忌々しさうに舌鼓をして、

「何を話してゐるだか、相手が那の人相の惡い野郎だ、いづれハア碌な相談ぶつてゐるでであるまい、まて〳〵何を話してゐるだか密と聽いてやるべい。」

若い頃から下僕として北川家に奉公して、六十の坂を越すまで十年一日の如く神妙に勤めて來た忠義者の朴平の心には、この與四郎を北川家の平和を亂す曲者、所謂獅子身中の虫であると睨んでゐたので、家のため主人のため、彼は絶えず與四郎の一擧一動に注意を拂つてゐたのだ　現在斯うした處を見ては其儘に見過ごして行く事は出來なかつた。

朴平は急いで坂を降りた、そして四柱亭の後方の梅の樹の蔭へ身を隱して凝乎と耳を澄ましてゐた。

けれども與四郎等の話しは只呟くやうな聲が聞える計りで、容易に其談の要領を得なかつた。

時も時、折も折、先刻與四郎が此の谷へ降りて來た衣笠村の方から、細い板橋を

渡つて此方へ近寄つて來た一人の婦人があつた。

その婦人の姿を四柱亭の中からチラリと見た與四郎は、

「おゝ、噂をすれば影だ、おい三公今話した一件が來た、其處へ來た。」

と彼は遽かに慌て出して、

「君が此處に居ちや都合が惡い、早く何處かへ隱れて呉れろ、早く〳〵俺は那の女に話しがあるんだから。」

と急立てた。

「ぢや今のお話しは爾ういふ事にすりや可いんですね。」

と三吉は素早く立上つて、梅の木立を縫ふて漸次に近寄つて來る婦人の方を見て、

「むゝ成程好い女だ、へゝゝ、大將旨くやりますね。」

「えゝ何でも可いから早く君が居つちや、都合が惡いんだ！。」

「おッと合點、何とかは宵の口、どりやお開きとしますべい。」

と三吉はこれを捨臺詞にツと、四柱亭を出るが否や、蝗のやうに身を飜して何處かへ消えて了つた。

其時婦人は最早四柱亭の六七間先まで近寄つてゐた、品の好い丸髷に赤い手がらが好く似合ふて、黒づんだ袷衣に黒繻子と友染の帶をしめた姿が繪のやうに美しく反物でも包んだらしい風呂敷包を、胸のところへ抱くやうにして俯目勝にチョコ〳〵歩いて來たのは鈴江であつた。

「鈴江さん、鈴江さん、何處へ行くんです？、僕だよ、待ち給へ。」

鈴江が四柱亭の横手を通つた時、與四郎は呼止めて駈けて出た。

「おや！。」

誰が痴漢？

鈴江は昨夜織揚げた御召の反物を西陣の織屋へ届けるため、先刻家を出たのであつたが、行きがけに天滿宮へ參詣して所夫文雄の無事健康を祈らうと思つて、土地の地理に通じたものが西陣へ行く間道、この梅の谿を越えて天神境内へと急ぐ折柄思ひ懸けもなく恁麼所に與四郎がゐて自分を呼止めたので、鈴江は惡い所で惡い人に遇つたと思つて、我知らず颯と顏に紅を散らした。

それを與四郎は何と見て取つたか、鈴江の行方へ立塞がるやうにして、三味線の胴と見るやうな四角な顏に一杯の笑を湛へた、

「何處へ行くんです。」

「鳥渡西陣まで參りますので！。」

と鈴江は最う逃げ支度をしてゐる、

「はゝゝ　貴方が此處を通る時に偶然にも僕が此處に居たといふのは奇遇だ、はゝゝまあ少し休んで行き給へ、此方へ入つて」

と危ふく其手を取らうとするのを、

「は、有難うございますが、妾急ぎますから失禮致します。」
と鈴江は輕く一禮して彼の前を驅け拔けやうとした。
「おッと待つた、其樣に氣急しくするものぢやない、西陣はドゝ何處へ行くんです？僕も彼處の方へ行くんだから一緒に行きませう。」
「ですけれど、妾急ぎますからお先へ參ります何うぞ其處をお退きなすつて下さい。」
「はゝ退かないよ君。」
と與四郎は愈〻前に立塞がつて、
「まあ君其樣な短氣なことを云ふもんぢやない、見ず知らずの他人ぢやあるまいし同じ家に住んでゐる、言はゞ兄弟も同樣の間柄だ　此〻で偶然出會つたのを幸ひ一緒に西陣へ連立つて行つたッて誰も何とも云ふものはないでせう。」
「では御座いませうけれど……。」

「御座いませうも御座いませんもないよ君、其樣なにマア嫌はないで待ち給へ、今直ぐ一緒に行くから。」
と與四郎は獨り呑込んで、
「おい〳〵婆さん、勘定は何程だね早くだよ、大急ぎだよ。」
と大聲で呼立てたが、聲に應じて彼處の茶店から駈けて來た婆に勘定を拂ふも遲しと、彼は鈴江と同行すべく身構へた。
鈴江は與四郎が斯うした馴〻しい擧動や、何となく無禮な言葉の端々がグッと癪に觸つたのみか、今朝與四郎が所夫を愚弄した其事を思ひ出して憎くて〳〵堪らず若し自分が男であつたら、恁麼寂しい所で遇つたのを幸ひ、今朝の遺恨を思ひ知らして遣らうものと、思つた。
けれども、元來優しく女らしく生れついた彼女は爾うした心の怨みや、憤を色にも見せず、片頰に含笑を見せたまゝ、風に柳の如かく與四郎に別れやうとした。

「それに妾天神様へもお參りして行き度うございますから、一足お先へ參ります。」

「可けない〳〵、其様な事を云つて逃げやうたッて容易に逃がすもんぢやない、はゝは。」

と與四郎は岩丈な身體を搖つて、

「さ一緒に行きませう。」

と迷惑がる鈴江と肩を並べて、

「君は其様なに僕を嫌ふけれど、斯う見えても此與四郎は、常から君に同情を寄せてる人間ですよ、君が那麽した北川の家庭で、甚麽苦勞をしてゐるか、他人は知らず此與四郎はチャント知つてゐるです、第一君のやうな美人で悧巧な婦人が、文雄君のやうな人物を所夫として貞女を盡してゐる、それが已に不自然だ、駿馬痴漢をのせて走る、實に君のために同情に堪へんのだ、僕は。」

鈴江は所夫を惡様に云はれて最う默つてゐる事が出來なかつた、思はず顏色を變へて、

「何でございますッて？、誰れが痴漢なのです？、文雄を痴漢だと仰有つたのですか？」

と屹と與四郎を睨んだ、其眼には少しく露を溜めて、梅の樹の陰からは朴平老爺が兩の拳を握つて凝乎と此方を見てゐた。

五　人　の　女

南無三こゝで鈴江の感情を害して了つてはと、與四郎は遽かに周章して洋杖を持つ手を右左に振つた。

違ふ〳〵、君、爾う取つて呉れちや可けない、僕は文雄君を痴漢といつたんぢやないので、物の諺を云つたので……、取消し〳〵、失言々々君の氣に觸つたら怨して呉れ給へ、はゝ、はゝゝ、全く惡い心で云つたんぢやないので、より多く君に

同情を寄するの餘り、つい口が辷つたので、はゝゝ口は禍の原、桑原々々謝します、謝します、謹んで謝します、此通り。」

と岩丈づくりの大の男の癖をして、卑しい身振りをしながら二つ三つ低頭をした。

「何をさらすだ、白痴者めが！。」

梅の樹の蔭では朴平老爺が舌鼓をした。

「莫迦者め分からねえだか、此處に朴平老爺がチャンと控へてるだぞ、汝奥様に指一本でも出して見ろ、此處から飛び出して汝が素ッ首拔いて呉れるだぞ。」

と心裡で叫んだ。

鈴江は爾うした與四郎の安つぽい態度を見ると、腹の立つ中に可笑しくもあり、

「いえ妾怒つたのではありません、それよりも妾の心が急きますから、先へ參ります、」

と云ふが否や、すいと與四郎の前を驅拔けて、鈴江は天滿宮の境内の方へ、小走り

に坂を登つた。

「やッ逃げちやいけない鈴江さん、待ち給へ、待ち給へ。」

續いて與四郎が坂の上へと追行かうとした時、時分は好しと朴平老爺は梅の蔭から飛出して與四郎の前へ仁王立。

「お前様與四郎さんでねえかよ？。」

と睨み付けた、

「おう貴様は朴平だな、退いて呉れ急ぐんだ。」

「はゝゝ何處へ行くだな？、何故其様なに急ぐだな？。」

「えゝ何でも可い、邪魔しないで其處退け、愚圖々々すると用捨はしないぞ。」

と與四郎は大聲で怒鳴り付けたが、爾ういふ中にも先へ心が飛んで氣が氣でなかつた、そしてバタバタと地團太踏んだ。

けれども朴平は金輪際から根を持つ大木のやうに突立つた儘、首を左右に振つ

て、

「はゝゝ退かねえだよ、與四郎さんお前様ハア誰追駈けて行くだね？。」

「誰でも可い、貴様の知つた事ぢやないわ、失敬な。」

「俺能く知つてるだぞ、お前様若奥様の後追ふて行くだんべい、止めさつせい、飛でもないことだ。」

「なにッ。」

「俺ハッ先刻から何も斯も見て居ただ、與四郎さん、そりやお前様が好くねえだぞはゝゝはゝゝ、まあまあ惡い事は云はねえだから、俺と一緒に歸らつしやい、さあ歸るべい、歸るべい。」

と朴平は與四郎の手を捉つた。

「えッ放せ失敬な？。」

と與四郎は其手を振拂つた。

「あら姐はんお見やす、其處にお居るのは岡田の旦那はんやわ。」

「まあ旦那はん、好いとこでお目に蒐りましたね、君葉さん、芳江さん岡田さんが此處におゐたのえ、早う早う。」

突然、坂の上から恁麼艶めいた聲が聞えたかと思ふと、何れも祇園乙部か宮川町邊りのらしい藝妓が二人に舞妓二人、仲居らしい女が一人、合せて五人の女がバラ〳〵と駈けて來て與四郎を取卷いた。

意外の出來事に朴平は呆れて飛退いた、ト女達は左右から與四郎の手を捉つてキャッきやと騒ぐのであつた。

昔の病氣

天から降つたか地から湧たか、青葉ばかりの梅の谿へ忽然咲いた花のいろ〳〵、緋だの紫だの、焦茶御納戸藍鼠ととり〳〵の色が亂れて與四郎の前後左右から雀

の囀るやうに喋べり立てた。

「本眞に貴方といふ御方は毒性なお人どすえ、那麽に確乎な約束を爲ときながら鼬の道切りやおへんか。」

「そりや何うせなア妾のとこへなどお越しやすのはお否どすやらう、他に好いとこが澤山おすのやらうけれど……、なあ姐はん、それでは妾達は兎も角、貴方はん君葉姐さんに濟まんやおへんか。」

と右左から仲居と藝妓がグイ〳〵と手を引張ると、後方と前の舞妓が腰を押すやら膝を突くやら、

「本眞に爾うえ、さあ〳〵最う斯う捉へたら百年目や。」

「早う一同と一緒に我家へおいでやす、早う〳〵、ほゝゝほゝゝ。」

君葉と呼ばれた女は梅の木を小楯に笑ひながら見てゐた、中にも口の達者な仲居は薄い唇を反らして、

「岡田はん本眞に那時から何うお爲やしたのどすえ、宅では毎日貴方はんの噂で持切つてるやありまへんか何ぼ待つてもおいでやへんので、昨夜は一同で相談して今日は早うから連れ立つて、天神さんへ參詣かたゞ〳〵、貴方はんお宅へ押掛けやうと思ふて此處まで來たところどすえ、此處で貴方はんに遇ふたのは本眞に天の祐や、最うお宅へ行く事だけは堪忍してあげますさかい、是から一緒においでやす。」

と其處に流るゝ溪間の水のやうな、小歇もなく辯じ立てた。

流石の與四郎もこの不意討には驚かずに居られなかつた、時も時なり折も折、別ても其處には朴平といふ頑固親爺が見てゐるので、彼は額や腋の下からタラ〳〵、汗を流して、捉られた手を振り〳〵、

「行くよ、行くよ、來いなら行くからまあ此手を放して呉れ、彼處に宅の下男が居るから、鳥渡彼奴に何して置かないと都合が惡いから。」

與四郎は漸くこの重圍から脱して、遥に離れて此體を見てゐた朴平の前へ來た、

「おい朴平、僕は貴様に頼みがあるが聞いてくれるか。」

「はゝゝお前様の頼みならハア何れ碌な事ぢやあんめい、はゝゝ、お前様あの女達はありや甚麼だね？、何處の狐か狸か知らねえが、この晝日中に出やがつて、お前様つまゝれて行くだな、はゝゝ。」

と朴平は腰から莨入れを拔き出して太い眞鍮煙管を咥へパッとマッチを摺つた、

「むゝ狐だ、狸だよ、全く狐狸の類だ彼奴等は……はゝゝ、しかしねえ朴平、貴様宅へ歸つて此事を伯母に話しちや可けないぞ、お頼みだから此場限りにねえ、頼むぞ朴平。」

「頼むといふならハア、そりや默つてもゐるべいが、お前様矢張り昔の病氣が癒らねえだなア。」

と朴平は嘆息してプッと掌へ吸殼を吹出した。

「何にね、鳥渡氣晴らしに何した丈なんだ、兎に角今日は是から彼奴等を撒いて來るから、宅へは内々にして置いて呉れろ。」

と與四郎は手早く紙入から何がしかを出して朴平に握らせやうとした。

「莫迦するでねえだ！。」

と朴平はそれを烈しく突戻してすッと立上がつた。

「俺ハア斯う見えても、衣笠村では誰知らぬ者のねえ北川の朴平老爺だ其樣なもの貰ふべいために頼まれる男でねえ、以來内の若奥樣に先刻のやうな事せぬちゆうなら、俺頼まれてやるべい。」

「むゝ爲ないよ、ありや何でもなかつたのだ、惡く感違ひしちや困るよ、はゝゝ。」

と與四郎は苦しい笑ひ方をして、

「ぢや頼んだぞ。」

と女達の方へ駈け出した。

櫻の宮

東に金剛信貴生駒の山々、西の方遠く摩耶六甲の峯も見えて南に際限もなく展開した平野で、春は堤の櫻と色を競うて一面に咲く菜種の花美しく北には、淀川の流れ清く對岸に造幣局を見る、こゝ大阪は櫻の宮の後水に面した二階建の一構へは、文雄が同窓の友山崎繁二郎の住居であつた。

その見晴らしの好い二階の十疊の間で、ビールの馳走を受けながら主人の山崎と相對して頻りに話してゐるのは文雄で、元來餘り飲けぬ口の彼が顏には、未だやう〳〵二コップばかり飲んだばかりであるのに、最う茜の色が染られてゐた。

折々何處からともなく匂ふ青葉の薫がしてチイ〳〵と鳴く雲雀の聲などが聞こえた少し話の途切れた時、

「大阪は好いねえ。」

と文雄はコップを下に置いて、欄干越に川を眺めた川には白い帆を揚げた舟が一艘ゆるい西風につれて上流の方へノロノロと上つて行つた。

「君は幸福だねえ、恁麼景色の好い處に住んで、充分腦頭を良くして置きながら出でゝ活動するんだから。」

と心から羨望に堪へぬやうに文雄は云つた。

「なあに、京都に比べちや、此處の景色なんかお話にならないよ、殊に君のゐる衣笠村などゝ來ては、實に風景絶佳の所だからね。」

と山崎は嬉しげに謙遜した。

「そりや京都も好いには好いが、僕の家なんかは舊式の家で、斯うして水に對して山を眺めた景色はないからねえ。」

「然うか、其中に一度御訪問しやう。」

「むゝ來て呉給へ、養父も喜ぶだらうから、しかし僕の家は古ぼけてゐて、恁麼立

派な住居ぢやないよ、はゝゝゝ。」

「然う褒められると御挨拶に困るねえ、此家もこれが吾輩の有だと可いがねえ、凡は或る官吏の別荘だつたのを、去年伯父が買つたので、吾輩伯父の御慈悲で當今無家賃で貸して貰つてるといふやうな譯だよ、はゝゝ詰らないよ」

結構だよ、他人の有なら何だが、伯父さんの御所有なら君の有も同じだ、借家住居とは云へないからねえ」

と文雄は世辭でも何でもなく心から爾う感じて云つた。

山崎は滿足な笑を湛へて、此家を伯父が買取つた時の價格や、上本町の伯父の本宅が此家に較べて更に立派である事や、自分も今に相當の本宅を建る考へである事やらを、什麼も得意氣に喋々と辯じ立てた。

爾うした談の中に、階下からは召使の女が其れから其れへと種々の珍味を運んで來た。

文雄は斯うした歓待を受けるが何となく氣の毒になつて、

「君、恁麼に御馳走して呉ちや困る最う構はず置いて呉れ給へ。」

「なあに、何も有りはしないよ、最う午刻だし、それに遠來の珍客だから、實は何處かへお伴して大に奢らなけりやならないんだが、今日は折惡く午後から此處へ訪ねて來る人を待つてるので、君には實に濟まないが、まあ〳〵忍耐して呉れ給へ、はゝゝはゝゝ。」

と山崎は心地よげにコップを擧げた。

「いや恐縮、實は今日は此の間出した手紙ね、あの一件で伺つたので、物を頼みに來て、恁麼御馳走になつては實に濟まんよ。」

「莫迦な、其樣な事があるものか、ところで、手紙の一件といふのは、那の會社の事かね？」

と山崎は凝乎と眼を見据ゑた。

「むゝ其事なんだ……。」

庶務課長

文雄は此の前山崎が嵐山温泉で當座の世辭で云つた言葉を飽までも信用し、それ以來は折に觸事に連れて其事のみを思ひ、與四郎などが舞込んで來て家庭に穩かならぬ漲るにつけても、自分は何でも病軀をおして一日も早く就職し、與四郎の嘲笑の眼や養母の毒々しい那の舌の劒から脱れんものと、山崎に宛てゝ彼の會社へ入社懇請の手紙を出したのであつたが、山崎からは折返して直返事が來て――其事なら自分も充分承知をしてゐる、就ては種々相談も爲たいから一度自分で大阪へ出て來給へ、委曲は書面では盡せぬから――といふ什麽も賴母しげな文言であつたので、文雄は最早山崎が承諾したも同じであると悅んだ、そして昨日は養父時輔に其事を云ひ出し、今日は日曜であるを幸ひ、時輔や喜代子の許可を得て態々京鄕から訪ね

て來たのであつた。

「何うだらう君、手紙でお願ひしたやうに、急に僕を會社の方へ採用して貰ふ事が能るだらうか、自分の勝手ばかり云つて實に濟まないが……。」

と文雄は膝を進めた。

「むゝ其事なら何だ、那の返事にも書いて置いた通り、豫め君に相談して置きたい事があるんでね？」

「成る程、何か僕を採用して貰ふ事に就て條件があるんだね？」

「まあ爾うだよ、はゝゝ。」

と山崎は變な笑ひ方をした。

「甚麽條件だね、僕の身體が虛弱だから其れに就て何か……？」

と文雄は又しても自分の弱點に不安な思ひをした。

「いえ其樣な事ぢやないんだ、君の入社したいといふ事に就て伯父とも相談したが

ね……、差當り會社の方に缺員といふものはないが、他ならぬ君の事だから、今庶務課長をしてる男を用度の方へ廻し、君を其跡釜に据ゑる事にしても可いといふんだが……。」

「最初から僕を庶務課長に採用して呉れるのか？」

と交雄は狂喜の眼を睜つた、若しや聞違ひではないかと自分の耳を疑ひながら。

「むゝ、其邊の都合は社長の伯父と支配人の吾輩さへ含んで居れば何うにでもなるんだ。」

「そりや爾うだらう、そりや爾うだらうが、僕に勤まるだらうか……。」

「勤まらん事があるものか、しかし其れに就て相談があるんだが、先づ君に心得て置いて貰はなけりやならないのは吾輩の會社の現狀だ。」

と山崎は遽に屹と容姿を改めて、

「實はねえ、是まで君には詳しい事は話さなかつたが、會社の方も近日大改革を爲

やうと企てゝゐるんだ、大阪には吾輩の會社と同じ營業をしてるのが都合三會社あつて其中で吾輩の方が一番新に創立せられたのだが、此の三會社がお互に競爭をして火花を散らして奮鬪してゐる結果は何うだといふに、まあ惡く言へば俱倒れの形だと云つて自然の結果競爭をしない譯にもゆかないんだ其處で吾輩の方でも今度增資を實行して大々的敵と對抗せうといふんで三十萬圓の資本を五十萬にする事にしたのだ。」

談がしんみりして來たので、交雄は熱心に聽いてゐた。」

勿論、恁麼內幕談をする山崎の心の奧には、そも〳〵甚麼考へがあるのか、それは世事に長じてゐぬ交雄には分からなかつた。

株主

「しかし君、ビールは何うだ、一向飲まないぢやないか。」

と山崎は話しの中途で文雄のコップへビールを注いで遣つた。

「いや最う澤山だ、大變醉つたよ。」

と文雄はコップを押へるやうにした。

「其樣な事があるもんか、大にやるべしだ、是れ位のものにヘコタレるやうでは、事業家にや成れないぜ、はゝゝ。」

「爾うかも知れないが、僕は酒の方は不得手でね、はゝはゝ」

「ぢやマア悠々とやり給へ。」

と山崎は自分で注いだコップを擧げて半合ばかり一息に呑み干し、

「其處で新に四千株新株を募集する事に成つてるんだがね、一株が五十圓で第一回の拂込が此の六月三十日限りで、一株の拂込高が十二圓五十錢といふのだ」

「むゝそりや、大發展だねえ」

と文雄は取敢へず合槌を打たねばならなかつた。

「それでだ北川君、君が會社へ入社を希望せられるなら、此際君にも株主の一員に成つて貰ひたいのだ、いや此事は吾輩の方から是非君にお願ひをするのだが何うだらう君、差當り百株ばかり引受けて呉れまいか。」

「はゝゝ、僕が株主に成るのか？」

と文雄は山崎の言葉を冗談だと思つて笑つた。

「うむ株主に成るんだ、株主にさへ成つて置けば、同じ社員に成つても使用人とは第一權利が異ふ、場合に依つては重役にも成れるからねえ、庶務課長位は何でもない事だ。」

「そりや爾うだらう。」

「君の家は富有だと聞いてるし、此際百株位引受ける事は何でもないから、何うだい北川君、是非この相談には乘つて貰ひたいのだが……。」

文雄は山崎の言葉の座興でも冗談でもないのを知ると同時に、思はず當惑の胸を

抱いた、五十圓株を百株、第一回の拂込を十二圓五十錢とすれば即ち千二百五十圓！、口でこそ僅か千二百五十圓であるが、其れが果して自分の資力に能ふべきであらうか、北川家の財産は養子の自分を會社員とするため、其會社の株券白枚を買ふ餘力があるであらうか、例令それは能ふべきことであると爲るも那の養父母が自分のために爾うした事を手易く許して呉るであらうか、それが到底不可能の事であると言ふことは改めて言ふまでもないと、文雄は山崎の手前返答に困つて了つた山崎は文雄が默つて考へ込んでゐるのを見て、

「何うしたんだ君、吾輩の會社の株を持つ事は不服かね、會社の將來に希望がないとでも思つてるのかね？」

「其樣な事はないが……。」

「爾うでなきや一つ奮發して呉れ給へ爾うすりや、吾輩も大威張りで君を社員として招聘する事が出來るのだからね」

と山崎は疊掛けて來た。

「株主にならなきや社員にはして貰へないのかね？、使つて貰ふ事は出來ないのだらうか？」

と文雄は漸く顏を上げた。

「平社員としてかね？、そりや更に伯父とも相談して見ねば分からんが目下の處普通社員の缺員はないからね」

と山崎は異樣な眼光をしてジロジロ文雄を視た。

「むゝ。」

文雄は途方に暮た顏をしたが、昔の親友たる山崎に此上は總ての事情を打ち明けていや、今の自分の辛い悲しい境遇を打明けて賴むより他はないと思つた。

其時、ドンと一聲、空氣を震動して午砲が鳴り響いた、同時に對岸の造幣局から汽笛の聲が耳を聾せんばかりに聞こえた。

自分の不明

水を渡つて來る造幣局の汽笛の聲が漸と歇むと、文雄は夢から覺たやうに前のコップを取上げて一口咽喉を潤し、

「それでは君の社へ使つて貰はうと思ふと、株主に成らなきやならないんだね。」

と念を押すやうに訪ねた。

「爾うさ、君の家位の資產家が、會社の株の百や二百位引受けるのは何でもないだらう、吾輩のやうな素漢貧と異つて、はゝはゝ、爾うぢやないか北川君、おい何うしたんだ何を其樣なに考へ込むんだ、はゝゝ。」

「それに就て少し君に聞いて貰ひたい事があるが……、君聞いてくれるか？」

「改まつて何だ？、はゝゝ、訝しいね。」

「暫時お互の交際に中絶はしてゐたげれど、君と僕とは中學時代の親友で、一個の

物も二つに割つて食合つた仲だから、君は必と僕の言ふ處に同情して呉るだらうとは思ふけれど……。」

「はゝゝ益々變に成つて來たね、全體何ういふ事だい北川君、その同情といふのは？」

「他ぢやないがねえ君。」

と文雄は沈痛な顏をして、自分が北川家の養子に成つてから今日までの經過自分の身體の不健康である事が家庭の平和を亂す第一の問題に成つてゐる事などを殆ど涙を流さんばかりにして話した。

「爾ういふ譯だから強て君にお願ひしたのだが、今の處株を引受けるといふ事は、不可能なんだといふのは、是も親友の君だから話すが、僕の養家の北川家は世間で許判するが如くいや君が思ふ如く其樣な富有ぢやないんだ、先祖から傳はつた田畠山林は疾くの昔に人手に渡つて今では養父の恩給金と少し許りの小作料とで一家の

生計を立てゐるといふ有様だから、例令養父が僕の爲に君の社の株を持たして遣らうと思つても、一家の財政が其れを許さないのだ……其様な譯だから君、僕のこの切ない立場を察して呉れて、何とか今一考して呉る餘地はあるまいか、お願だ山崎君、一生のお願だから君、

と文雄は奥底もなく自分の耻まで打明けて友情に訴へた。

先刻から肩を搖つたり膝を動かしたり、川の方を眺めたり天井を振仰いだりして聽いてゐた山崎は、其時ホツと欠伸を一つして、

「はゝゝ大變な愁嘆談だね、成る程爾う伺つて見ると大に君に同情をせなけりやならんが、ナニ同情はしてるよ、同情はするが、同情をしたからといつて、直に君の要求に應ずるといふ事は……、はゝはゝ、君惡く取つてくれちや困るよ、何分會社の方は僕の一丁簡では何うする事も出來ないんだからねえ」

山崎の態度は今までとは卒然に變つた、口の先では程好いやうな、事を云ふけれど、ジロ〳〵文雄を見る眼の底には一種の輕侮と嘲りの光が煌いてゐた。

「ところで何うだい、君は最早ビールはやらんやうだが、飯を命じやう吾輩も御相伴するから。」

と山崎はポン〳〵と手を鳴らして女を呼んだ文雄は爾うした友の冷い態度を見て實に意外であると思つた、那麽ほど親しかつた友人が、暫時別れてゐる中に斯うも心の變はるものであらうかと、飽まで此友を信じた自分の不明を悔さずにはゐられなかつた。

慈愛の聲

庭の青葉に風薰る午後二時頃、

「鈴江、鈴江、鳥渡來てくれ、鈴江は居ぬか。」

といふ時輔の聲が奥の方から聞えた、

折柄鈴江は只一人でコト〳〵勝手元を働いてゐたが、其聲を聞附けると急いで濡手を拭いて奥へ駈けて行つた。

「お父様お呼びなさいましたのでせう、何か御用ですか。」

「むゝ少しお前に話し度い事があるで呼んだのぢや、まあ此處へ來るが可え、此處へ此處へ。」

と時輔は機嫌の好い顏をして、閾際に手をついてゐる鈴江を麾いて、

「何か爲てゐたのか？」

「えゝあの臺所の掃除を……。」

「あゝ爾うか、其樣なに休みなく働くと身體に障るぞ、はゝはゝ、さあ此方へ來るが可い。」

「はい。」

時輔は例に依つて座敷の縁側へ座布團や煙草盆を持出し、手づから茶を入れて其

れを喫みながら庭の景色を眺めてゐるのであつたが喜代子は與四郎に誘はれて南座の演劇を看るとて、お釜を供に春江をも伴れて早晝を濟まして出て行つたので狹からぬ家の内は時輔と鈴江の唯二人で、物寂しいやうに森閑としてゐた。

時輔は茶盆を引寄せ新たに茶を入れ換へて、

「さあ茶が入つた、お前も一つ喫むが可え。」

と鈴江に注いで遣つて、

「あの網代の棚の上に食籠があるから持つて來て呉れ、おゝ爾うぢや、其れぢや、たしか最中が入つてゐた筈ぢや。」

鈴江が徐に立つて其れを持つて來ると、時輔は中の最中を一つ摘んで食べながら、

「お前も食べると可え、さあ。」

「はい難有うございます。」

と鈴江は嬉しげに含笑んで輕い會釋をしたが養父が斯うして自分を側近く呼んだ用事は甚麽であらうと、苦勞性の彼女には流石に胸が騷いだ。

「あのお父樣お話しと仰有いますのは、何でございますの？」

「はゝゝ爾う心配するやうな事ぢやない、幸ひ今日はお母樣も留守ぢやし、あの與四郎も居ぬで、丁度好い折柄ぢやと思つてな。」

「は……。」

と鈴江は思はず膝を進めた。

「他でもないがの、今日は文雄が大阪へ行きよつた事について、少しお前に相談がして置たいと思ふて喃。」

「はい……。」

鈴江は不知不識首を垂れた、さらぬも今日の所夫の大坂行に就ては、鈴江は朝から煩に心を惱ましてゐたので、所夫は最う疾くに先の會社と契約濟みにでもなつてゐるかのやうに云つて行つたけれど、世に謂ふ目的事と何ゝやら、若しや所夫の思ふやうに事が捗取らぬ時は所夫の失望は兎に角として、あの吵ましい喜代子や、意地の惡い與四郎が何と謂ふて所夫を嘲るであらう……？、鈴江は其事ばかりが今の胸の屈托であつた處へ、養父から斯うした談を向けられぬので、最う安き心はなかつた。

時輔は片手で頤の髭を撫でながら心配さうな顏をする鈴江を憐れむやうに見遣つて、慈愛の籠つた聲で慰めた、

「何も其樣なに氣遣ふやうな事ぢやないから、安心をして俺の謂ふ事を聽いて呉るが可え。」

「はい。」

家のため

午後の太陽に照らされた庭からは、ほやほやい緑の梢から梢に和かい風が渡つて〳〵と陽炎が立つてゐる。

時輔は徐に煙草を一服喫んで、

「お前は何と思ふか知らぬけれど、俺は今日文雄が大坂へ行きよつた事に就て少し腑に落ちぬ事があるのぢや……、と謂ふのは彼は自分が行きあへすれば直にも先方で手を受けて挨つてゐるやらに云つたがの。俺の考へでは世の中の事は爾うは往かぬ、何程舊友と堅い約束をして置いたからと云つて、甚麼都合で彼の希望に添はぬ事があるかも知れぬぢやらうぢや、お前は爾うは思はぬかの？」

「御尤もでございます。」

鈴江は唯是丈の返答をするより他に言葉は出なかつた。

「其處でぢや、俺の思ふには、彼奴那麼大きな事を云つて行きよつたものゝ、十がものは七つまで、失望して歸るぢやらう、固より其樣な事は願はぬ事ぢやが、彼が今度大坂へ行くと云ひ出した動機、それが何うも一時の發作的の據動で、什麼も輕走のやうに俺には見られたのぢや。」

斯う云はれて見ると、鈴江も養父の言葉を成程と思はずにはゐられなかつた。

時輔は輕く吐月峯を叩いて、

「俺が云はずともお前が知つてる通り、元來彼の爲る事や云ふ事は病的で、今度の事もそれぢや、こりや屹と彼の與四郎かお母樣に何か云はれたのが彼の神經を刺激した結果ぢやらうと思ふのぢや。」

流石に老巧なだけに時輔は目が高かつた。

「眞逆其樣たことはございますまいげれど……。」

と鈴江は言葉を濁して下向いた、心裡には此の間所夫を嘲弄しだ與四郎の憎い態度

が明々と見えた。

「いや〳〵。」

と時輔は頭を掉つて、

「爾うに違はぬ、俺は恁麽不自由な身體ぢやから、毎日斯うして此所にじつとしてゐるが、家の事は何でも知つてゐるのぢや。」

と髭を握つてじつと眼を据えたが、直思ひ直して、

「はゝゝ、困つたものぢや、女子と小人は養ひ難しといふからの。」

と嘆息した。

鈴江は唯もう挨拶に困つて自分の膝を見詰めてゐた。

「彼奴等が種々文雄の一身上に就いて刺激を與へたので、彼は例の神經を起して急に大坂へ行く氣にも成つたのぢやらう、しかし、今も云ふ通りで、行つて見た結果丁うなるか分からぬ　萬一目的通りにゆかずに悄々歸つて來るやうな事でもあると

此際彼の爲に誠に好くないぢや。」

「はい……。」

「喜代子は又口喧しう何かと云ふぢやらゝう與四郎は與四郎で其れに合槌を打ちよるぢやらう、爾ういふ事になると、彼は兎に角、家のために誠に面白からんぢや、俺は爾ういふ事が何より、嫌ひぢやから喃。」

「左樣でございます……。」

「そこで其れに豫め防ぐために、俺がお前に相談があるのぢや、お前一つ俺のためなり家の爲いや、文雄のために骨を折つて呉ぬか。」

と時輔は露をつたやうな眼をして凝乎と鈴江を瞻入つた。

謎のやうな養父の言葉の奥には甚麽深い意味が含んでゐるか、それは鈴江にも直ぐ判斷する事は出來なかつたが、

「それは最う、仰有るまでもございませんで、妾の身に及びますことなら甚麽ことで

も倘せに從ひまして……。」

と柔順に答へて、其儘又眼を落として自分の膝を見詰めた。

裏の畑の方から朴平老爺の歌をうたふ聲が聞こえた。

文庫

時輔は聞くともなしに偶とその歌の聲に耳を傾けたが、直ぐ又鈴江に向つて、

「相談といふのは他でもないがの、今云ふやうな譯ぢやで、今夜にも文雄が大坂から歸つて來よつたら、誰にも知らさぬやうにお前から密と文雄に話して貰ひたい事があるのぢやと云つて、

「あの机の横にある文庫を取つて呉れ、おう其れぢや〳〵。」

代々家に傳はるらしい古い蒔繪の文庫を鈴江に持つて來させて、時輔はそれを大切さうに自分の側へ置いた。

「彼がお母さんにも誰にも顔を合はさぬ前に、お前が密と彼に大坂の容子を聞いての、幸ひに會社の方が都合好く運んだら可えが、若し爾うでなうて、俺の考へのやうに談が旨く纏まつて居らんやうぢやつたら、お母樣や與四郎には萬事都合好く纏まつたやうに云つて、一時家を出るやうに話して貰ひたいのぢや、解つたかの？」

鈴江はハッと思つて養父の顔を瞻た時輔は文庫の蓋を開けて底の方から一つの紙包を取出しそれを、鈴江の膝の前へ置いた、

「此中に金が五十圓ある、それを文雄に遣つての、當分の間須磨か有馬へでも行つて養生して來い、そして與四郎などには大坂の會社へ勤めてゐる體にして置くやうに、五十圓あれば節儉さへすれば二ヶ月位は何處でゝも遊んでゐられるで、爾うしてゐる中に、他の方面に口も掛けて見るが可え、其時になつて好え口がないにしても其時は其時で又其時の風が吹くからの、俺にも少し考へる處があるから、惡くは計らはぬ、よいか、解つたかの？、お前が俺の心裡を能く胸に疊んで、文雄に爾う

云つて遣つて呉れるやうに。」

「はい……。」

鈴江は此時始めて養父の心が能く釋めた、そして爾うした慈愛の深い養父の心が身に泌々と泌込むやうで、難有さ勿體なさに胸が一杯になつて、兩の眼に涙が溢れた。

「あり、難有うございます、それではお歸りになりましたら、誰にも知れぬやうに屹と爾う申します……、難有うございます……。」

と顔を背向けて眼を拭いた。

「むゝ爾うして呉れ、爾ういふ事に爲ぬと何かと蒼蠅いでの。」

「妾其が至りませんために、恁麽に種々の苦勞を掛けまして……、申譯がございません。」

「いや〳〵、何もお前達の故ばかりではない、しかし文雄も決して好くはない、身

體が弱いで詮方がないやうなものゝ、彼れは自體氣樞に乏しい、勇氣がないぢやから口喧しやの喜代がいろ〳〵と云ふのぢや、俺も一時は文雄に就ては、那麽では迚もと思はぬでもなかつたがの、段々考へて見ると、お前や春江が可憐でならぬからのう、又思ひ直しても見たり爲たのぢや、それに此頃は又那の與四郎めが來やがつて。」

と時輔は苦い顔をして頤の髯を力强くしごいた。

「南洋で成功して來たなどゝいふが俺の見た處では危いものぢや、はゝゝ、何に成功して來よつたか、喜代は一人よりない甥ぢやで、全然欺されて ゐるらしいのぢや。」

「其樣事もございますまいけれど。」

「俺は那麽して彼奴を宅に置くのは氣に入らぬ、しかし俺には元々他人で、喜代には只た一人の甥ぢやからの、喜代に對して俺が故障をいふのは何ぢやから、まあ何

事も時節の來るまでと默つて見てゐるのぢや。」

と時輔は忌々しさうに吐月峯を鳴らした。

俺が此胸に

鈴江は所夫文雄より一年早く、この北川へ養女として貰はれて來てから此方五年今日が今日まで養父と差向ひで斯うして泌々話しを爲たことはなかつた、所謂女房天下の北川家は、何事も養母喜代子を差置いて直接に養父に話すことは出來なかつた唯養父時輔は萬事に寡默な人、慈悲はあるが氣の取り苦い人、何から何まで養母の采配一つで竪にも横にも成る人とばかり思つてゐたのであつたが、今日斯うして親しく養父の話しを聞いて見ると、その同情の深い世に言ふ酸も甘いも嚙分けた養父の心が始めて釋つて、勿體ないとも有難いとも、何とも譬へやうがなかつた、

「あゝ妾は未だ〳〵孝行が足らない恁麼お優しいお情深いお父樣とは今の今まで知

らなかつたのが勿體ないお父樣が斯うしたお心なら、妾は苦勞の甲斐がある、甚麼辛い悲しい思ひをしても些とも苦勞とは思はぬ、是れからは此のお父樣のためと所夫文雄のために、此身一つを甚麼にも苦めてそして、北川家の將來を幸福にせねばならぬ、それが妾の務だ、天から命ぜられた妾の使命だ！。

鈴江は心に斯う思ひながら、嬉し涙にぬるゝ眼を上げて泌々と時輔を見遣つて、

「それでは、お父樣これを頂きまして今晩にもお歸になりましたら……。」

と情の紙包を押戴いた。

「あゝ爾うして呉れ、萬事はお前が俺の心に成つての、それから若し幸ひに會社の方が好都合ぢやつたら、其金は萬一の時の準備金にして置くか好いと云つてくれ、よいかな。」

「承知致しましてございます。」

「お前にも種々苦勞をさせて氣の毒ぢやが、何事も因緣ぢやと辛抱してくれ、萬事